山大寺池西丘上2・3号墳
南　天　枝　遺　跡

2004.3

三木町教育委員会

山大寺池西丘上2・3号墳
南　天　枝　遺　跡

2004.3

三木町教育委員会

はじめに

郷土に残されている文化財は、その土地の歴史や文化を理解する上で欠くことのできない貴重な歴史的遺産であります。これらの文化財の適切な保存・活用を図り、文化的向上に資することがわれわれの責務と考えます。

このたび、災害復旧に伴って実施した山大寺池西丘上２・３号墳と民有地地下げに伴って実施した南天枝遺跡の発掘調査結果を本書に収録いたしました。前者では新たに弥生時代終末期の３号墳が確認され、また後者では県の調査とあわせて、古代からの集落跡の広がりを確認できました。

これらの発見は本町の歴史に新たな１ページを加えることになりました。本書が地域史解明の資料として、また今後の文化財保護・保存のための一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施、報告書作成に際し、関係諸機関および関係者各位から賜りました多大なご指導とご協力に対し、御礼申し上げます。

平成16年３月

三木町教育委員会

教育長　小　川　和　夫

例　言

1．本書は以下に実施された埋蔵文化財発掘調査の報告を収録した。

(1)　災害復旧に伴い実施された、木田郡三木町大字上高岡字山大寺に所在する「山大寺池西丘上２・３号墳」の埋蔵文化財発掘調査報告書

(2)　民有地地下げに伴い実施された、木田郡三木町田中字南天枝に所在する「南天枝遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書

2．発掘調査の期間は、以下のとおりである。

山大寺池西丘上２・３号墳　　平成６年７月17日～平成６年８月５日

南天枝遺跡　　平成９年２月13日～平成９年３月31日

3．発掘調査は三木町教育委員会主事　石井健一が担当した。なお、山大寺池西丘上２・３号墳は香川県教育委員会文化行政課　國木健司氏の指導を得た。

4．本書の作成は、三木町教育委員会から㈱イビソクに委託され、同社の持田　透がこれを実施した。作成期間は平成15年７月１日から平成16年３月27日である。

5．遺物の整理・実測は持田が行なった。またトレースは㈱イビソクにて実施した。

6．発掘調査から報告書作成に至るまで、下記の方々に助言、協力をいただいた。敬称略。

西村尋文（財）香川県埋蔵文化財調査センター）

7．遺物写真撮影は寿福写房に依頼した。

8．本書の編集は、三木町教育委員会主事　高重和範の総括のもと、持田が行なった。

9．本書における表記及び記述に関する凡例は以下の通りである。

SD…溝　SK…土坑　SP…柱穴　SH…竪穴住居　SB…掘立柱建物

10．本書で用いる標高はすべて海抜（東京湾平均Ｔ．Ｐ）で、方位は磁北を示す。

11．本書第２図「周辺の遺跡位置図」の作成にあたり、国土地理院発行の１／25000地理図「志度」「鹿庭」を使用した。

12．本書「遺物観察表」で、器高が括弧書きのものは残存高を示す。また色調については『新版標準土色帖』を使用した。

本　文　目　次

序　　文
例　　言

（山大寺池西丘上２・３号墳）
第１章　調査に至る経緯 …… 3
第２章　立地と環境 …… 4
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 4
第３章　調査の成果 …… 8
　第１節　２号墳の調査 …… 8
　　１．土層 …… 8
　　２．出土遺物 …… 8
　第２節　３号墳の調査 …… 12
　　１．遺構 …… 12
　　２．出土遺物 …… 15
第４章　まとめ …… 16
遺物観察表
写真図版

（南天枝遺跡）
第１章　調査に至る経緯 …… 31
第２章　立地と環境 …… 32
　第１節　地理的環境 …… 32
　第２節　歴史的環境 …… 32
第３章　調査の成果 …… 35
　第１節　調査区 …… 35
　第２節　基本層序 …… 35
　第３節　遺構・遺物 …… 36
　　１．竪穴住居 …… 36
　　２．掘立柱建物 …… 36
　　３．溝 …… 45
　　４．柱穴 …… 45
　　５．不明遺構 …… 45
　　６．包含層出土遺物 …… 45
第４章　まとめ …… 48
遺物観察表
報告書抄録

図　版　目　次

（山大寺池西丘上２・３号墳）

第１図　三木町の位置
第２図　周辺の遺跡(S＝１／25000)
第３図　調査区位置図(S＝１／2500)
第４図　調査前現地状況図(S＝１／200)
第５図　遺構配置図(S＝１／200)
第６図　２号墳　断面図(S＝１／40)
第７図　２号墳　出土遺物実測図(S＝１／４)
第８図　３号墳　平面図及び遺構断面図(S＝１／40)、出土遺物実測図(S＝１／４)

（南天枝遺跡）

第９図　三木町の位置
第10図　周辺の遺跡(S＝１／25,000)
第11図　調査区位置図(S＝１／500)
第12図　遺構配置図(S＝１／400)
第13図　SH－01遺構図(S＝１／40)
第14図　SH－02遺構図(S＝１／40)
第15図　SB－01･04遺構図(S＝１／80)
第16図　SB－02･05･06･07遺構図(S＝１／80)
第17図　SB－03･08･09遺構図(S＝１／80)
第18図　Ⅱ区遺構平面図及び壁面断面図(S＝１／80)
第19図　出土遺物実測図(S＝１／４)

写　真　図　版

（山大寺池西丘上２・３号墳）

図版１　調査前状況　北より
　　２号墳近景
図版２　２号墳盛土土層断面
　　３号墳周溝検出状況
図版３　３号墳SK－01（第１主体部）完掘状況
　　３号墳SK－01（第１主体部）土層断面
図版４　３号墳SK－02（第２主体部）完掘状況
　　３号墳SK－03（第３主体部）完掘状況
図版５　出土遺物

（南天枝遺跡）

図版６　Ⅰ区近景　西から
　　SH－01　検出状況
図版７　SH－01　竈土層断面
　　SH－02　完掘状況
図版８　SB－01　検出状況
　　完掘状況
図版９　SB－02・03　検出状況
　　SP－114（SB－02）　遺物出土状況
図版10　SB－05～09　完掘状況
　　Ⅱ区完掘状況
図版11　Ⅱ区SD－02　完掘状況
図版12　遺構出土遺物
図版13　包含層出土遺物

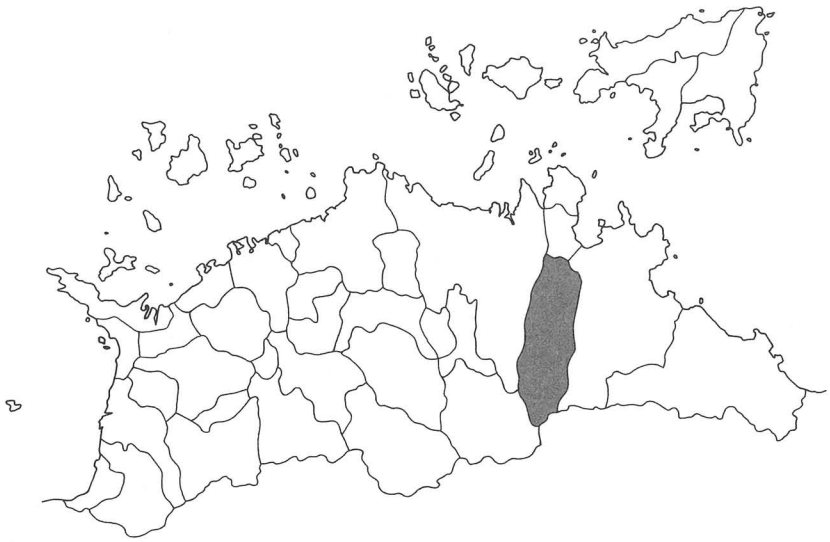
山大寺池西丘上２・３号墳

第１章　調査に至る経緯

平成６年、三木町上高岡地区の嶽山（標高204ｍ）から北東方向に派生する丘陵先端頂部付近で幅20ｍにわたり地滑りが発生していることが判明した。そこで、その箇所を含む東側斜面部3,340㎡について切土を行い、安定勾配による法面を形成し、災害防止措置を講じることとなった。

ところが、災害復旧工事の事業予定地内に周知の埋蔵文化財である山大寺池西丘上２号墳が存在していることから、工事を一時中断することとなった。そこで、当町教育委員会はその所在を確認するため、平成６年６月25日に試掘調査を実施した。調査の結果、３本のトレンチのうち丘陵頂部に設定した箇所から石列遺構及び弥生土器を検出し、保護措置を図ることとなった。

なお、発掘調査は香川県教育委員会文化行政課の指導により平成６年７月17日から同年８月５日まで実施した。



第1図　三　木　町　の　位　置

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

三木町は香川県木田郡の南部に所在する。行政区分では東西南北にそれぞれ、さぬき市、高松市、木田郡牟礼町、香川郡塩江町・徳島県美馬郡脇町と接する。地形的には北は標高２～300mの立石山地、南は標高５～900mの阿讃山脈に囲まれている。南の阿讃山脈に源を発する吉田川・新川は北流して、三木町中央部に沖積平野を形成する。そして西方の高松平野へと至る。

第２節　歴史的環境

山大寺池西丘上２・３号墳の所在する三木町は、近年の発掘調査により多くの発見がなされている。

旧石器時代については、主とした遺跡は存在していない。しかし七ツ塚古墳群からサヌカイト製翼状剥片が、池戸八幡神社古墳群の丘陵南端の切り通しから小型ナイフ形石器片が出土している。

縄文時代については南天枝遺跡の小流路と考えられる地点から縄文時代晩期の浅鉢が１点出土しているのみである。町周辺では高松市十川東・平田遺跡から縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土している。

弥生時代については、著名な遺跡遺物が知られていたが、近年の発掘調査で少しずつその詳細が判明するようになってきた。弥生時代前期では、多量の土器包含層が確認された農学部遺跡や福万遺跡などがあげられる。これらの遺跡では、前期中葉までは確認されていないが、後葉以降の土器が多量に出土している。弥生時代中期では、鹿伏・中所遺跡で集落が確認されている。中期末になると西浦谷遺跡、白山３遺跡などの高地性集落に移っていく。後期は集落域が平野全体に広がり、西浦谷遺跡、池戸鍋渕遺跡、砂入遺跡、鹿伏・中所遺跡、田中南原遺跡などが数えられる。鹿伏・中所遺跡では、竪穴住居が70棟、掘立柱建物が20棟検出されており、他に比較して遺跡規模が大きい。当時期の中核的集落と考えられる。また、全体の規模は不明だが、田中南原遺跡も検出した住居跡数は多く、中核集落となりうる存在である。墳墓資料に関しては、弥生時代中期後半から古墳時代初頭の遺跡が多く、中期では、丘陵上に土壙墓や壺棺墓が営まれる白山３遺跡、天神山古墳群、西土居遺跡群などがあげられる。後期後半から終末期になると土器棺墓をもつ丸岡Ａ・Ｂ墳墓群や石塚古墳群に加えて、山大寺池西丘上３号墳や西土居遺跡群で丘陵上に方形台状墓が形成されるようになる。また天満遺跡は、弥生時代終末期の墳丘墓であると考えられる。

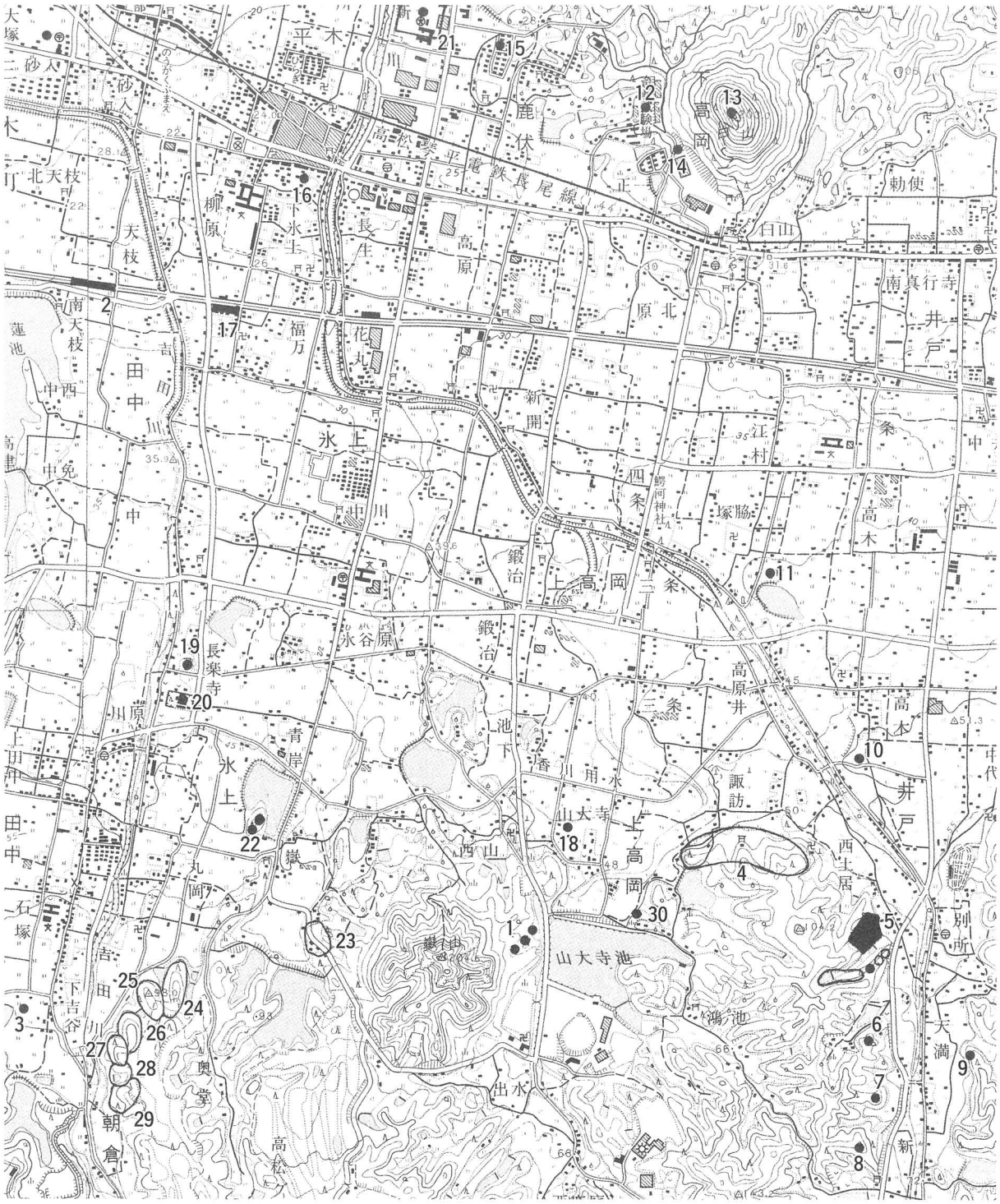
古墳時代については、町内唯一の前方後円墳である池戸八幡神社１号墳が古墳時代前期初頭の所産と考えられている。全長約38m、後円部径約20mを測り、柄鏡状を呈する。古墳時代中期後半から三木町の古墳の造成が活発となる。権八原古墳群は５世紀後半に比定される古式群集墳である。組み合わせ箱式石棺を主体部とする、円墳などを９基検出している。６世紀前半には町南部の独立丘陵上に築造された堀切１号墳がある。竪穴式石室を主体部にもつ直径14.5mの円墳で、円筒埴輪の出土が知られている。また七ツ塚古墳群や西土居古墳群などの群集墳が存在する。６世紀後葉から町内の古墳に横穴式石室が採用されはじめ、７世紀から活発化する。町南部では、山大寺池西丘上２号墳、蛇ノ角古墳群、諏訪カンカン山古墳群など丘陵ごとに数基から10数基が群集している。また、大型の横穴式石室をもつ龍現社古墳も町南部の丘陵に位置する。町北部では椿社古墳や風呂谷古墳など単独で築かれるという特徴がある。

古代については、律令体制にともなう条里が区画され、三木町中央には南海道の存在が推定され

ている。白鳳期以降に建立された始覚寺跡、香蓮寺跡、上高岡廃寺跡、長楽寺跡などの古代寺院が存在し、近年試掘調査の行われた始覚寺跡では、寺域に北接して4基の瓦陶兼業窯が存在し、寺院に供給されていたと考えられる。また、寺域もほぼ1町四方であることも確認されている。7世紀頃の集落では、吉田川水系に所在し、南天枝遺跡と隣接する尾端遺跡があり、同水系上流に所在する長楽寺跡との関係も指摘されている。また北方丘陵には小谷窯跡が所在し、7世紀を中心に須恵器生産を行っていた。

中世については、三木町は管領細川頼之の四国支配の時代の後、守護代安富氏の統治となる。安富氏は東讃地域の守護代であったが、領域内に香西氏・寒川氏・植田氏などの諸勢力を抑えきれず、三木郡内にのみその影響力がおよんでいた。戦国時代になると、三木城を中心として勢力を誇っていた三木氏が途絶え、安富氏が代わって三木郡を支配するようになった。しかし長宗我部氏の讃岐侵攻時には、東讃においては十河城に拠点をおく十河氏のみが強大で、安富氏も十河氏とともに侵攻に対抗した。平木城を中心に戦火は激しかったという。他にも町内には串田城、池戸城などの城跡がのこる。

参考文献
三木町　1978 『三木町史』
松田重治・二神希代江　2003 『西土居遺跡群』 三木町教育委員会
西村尋文編　2003 『寺田・産宮通遺跡　南天枝遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
松本敏三編　1975 『権八原古墳群発掘調査概報』 国立医科大学候補予定地内埋蔵文化財発掘調査団



1 山大寺池西丘上１・２・３号墳
2 南天枝遺跡
3 田中南原遺跡
4 諏訪カンカン山古墳
5 西土居遺跡群
6 剣山古墳
7 天満遺跡
8 西山古墳
9 天満古墳
10 高木古墳
11 八王子古墳
12 白山１遺跡
13 白山２遺跡
14 白山３遺跡
15 天神山古墳群
16 串田城跡
17 福万遺跡
18 山大寺跡
19 中坪城跡
20 旧長楽寺跡
21 鹿伏・中所遺跡
22 堀切古墳群
23 蛇の角古墳群
24 丸岡Ａ墳墓群
25 丸岡Ｂ墳墓群
26 石塚Ａ古墳群
27 石塚Ｂ古墳群
28 石塚古墳群
29 勝負谷古墳
30 山大寺池北丘古墳

第２図　周辺の遺跡（Ｓ＝１／25000）

第３図　調査区位置図（Ｓ＝１／2500）

第３章　調査の成果

山大寺池西丘上古墳群は嶽山から東に延びる舌状の丘陵上に位置し、山大寺池を東に眺める。丘陵の尾根線上に西から１号墳、３号墳が所在し、丘陵先端に２号墳が形成される。今回の調査対象範囲は東側丘陵の先端に存在する２基の古墳を含む、700㎡である。調査にあたり任意の基準杭を設定し、現地状況図を作成し、調査以前の崩落状況等を確認した。（第２図）

第１節　２号墳の調査

２号墳は調査区北端に位置する。東側は崩落により墳丘が失われている。３本のトレンチを設定し、墳丘範囲と周溝の確認を行なった。（第３図）なお主体部はすでに失われていたため、主体部は確認できなかった。

１．土層（第６図）

第１トレンチは、墳頂部から南に５ｍの間隔で設定した。表土である腐葉土を取り除くと、淡黄灰色、黄灰色のバイラン土が体積しており、掘削深度0.3m～0.5mで地山土となる。墳頂から緩やかな傾斜をもち、２ｍの地点で基底部を確認した。

第２トレンチは、墳頂部から西に４ｍの間隔で設定した。第１トレンチとおなじく、淡黄灰色、黄灰色のバイラン土が体積している。墳裾にかけて堆積が厚くなり、掘削深度0.1m～0.7mで地山土となる。墳頂から2.1mの地点で基底部を確認した。

第３トレンチは、墳丘を南北方向に断ち割る形で設定した。最大掘削深度0.9mで地山土となる。トレンチ北側では、黄灰色土、黄灰白色土、黄茶色土で突き固めた土堤を確認した。また、トレンチ北端で基底部を確認した。

旧地形は標高76.1mを頂点として北側にむけて緩やかに傾斜している。その傾斜地に盛り土を施して墳丘を形成している。盛り土造成に際し墳丘北側裾に土堤を作り、土止めをしている状況を確認した。

２．出土遺物（第７図）

遺物は全て墳丘東側の法面周辺から調査終了後の造成工事中に出土した。法面の防護網が敷設されていたため調査が不可能だったことによるものである。出土状況はあきらかではないが、石室の石材は認められなかったため石材が抜き取られたあとの玄室床面残存部におかれていたものと推定される。

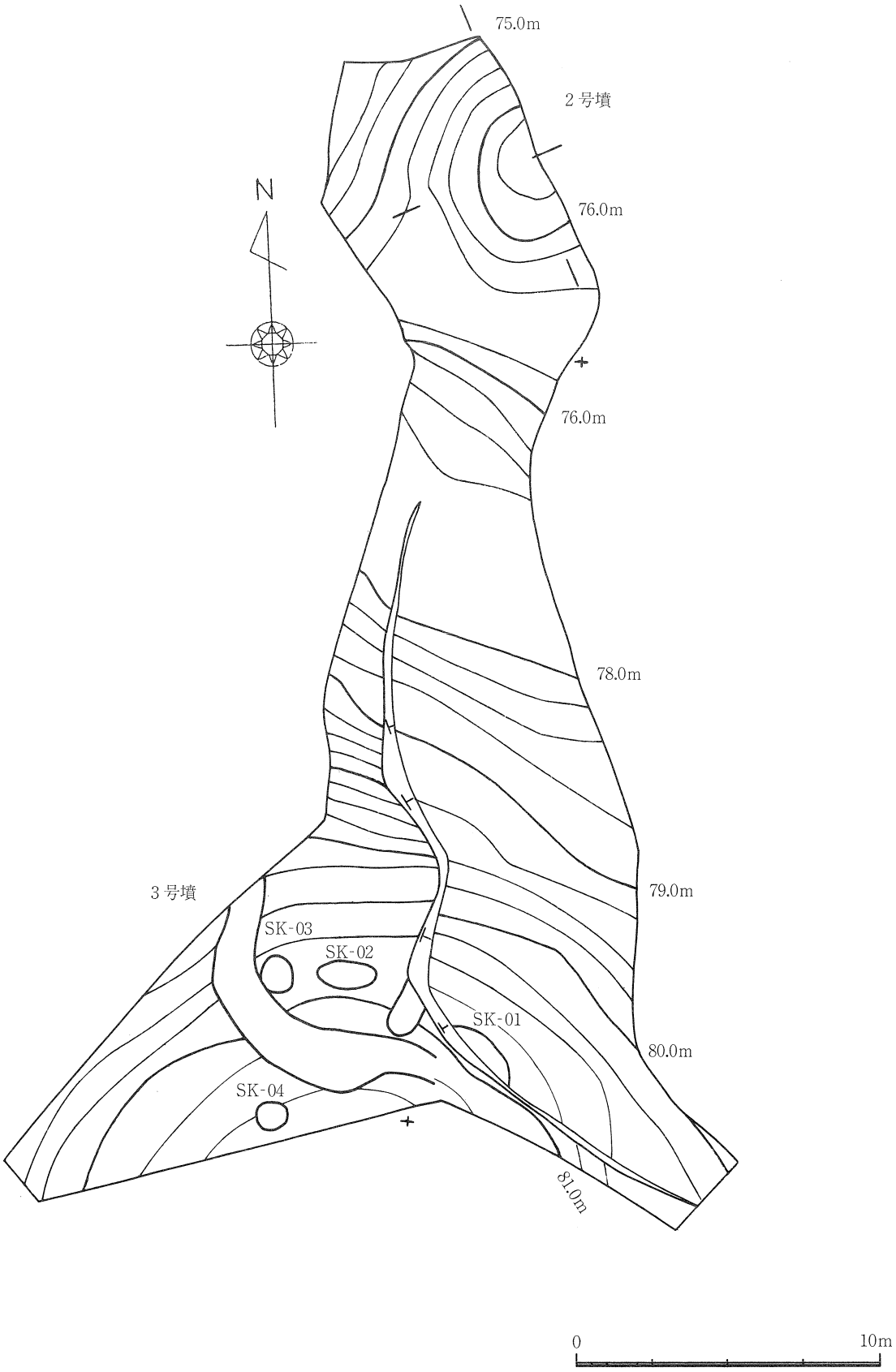
瑯（１）

１は瑯の口縁部である。やや太めの頸部からハの字に開く。口縁部外面の段は緩やかである。頸部には沈線２本を巡らし、その上位に右肩上がりの刺突を巡らす。

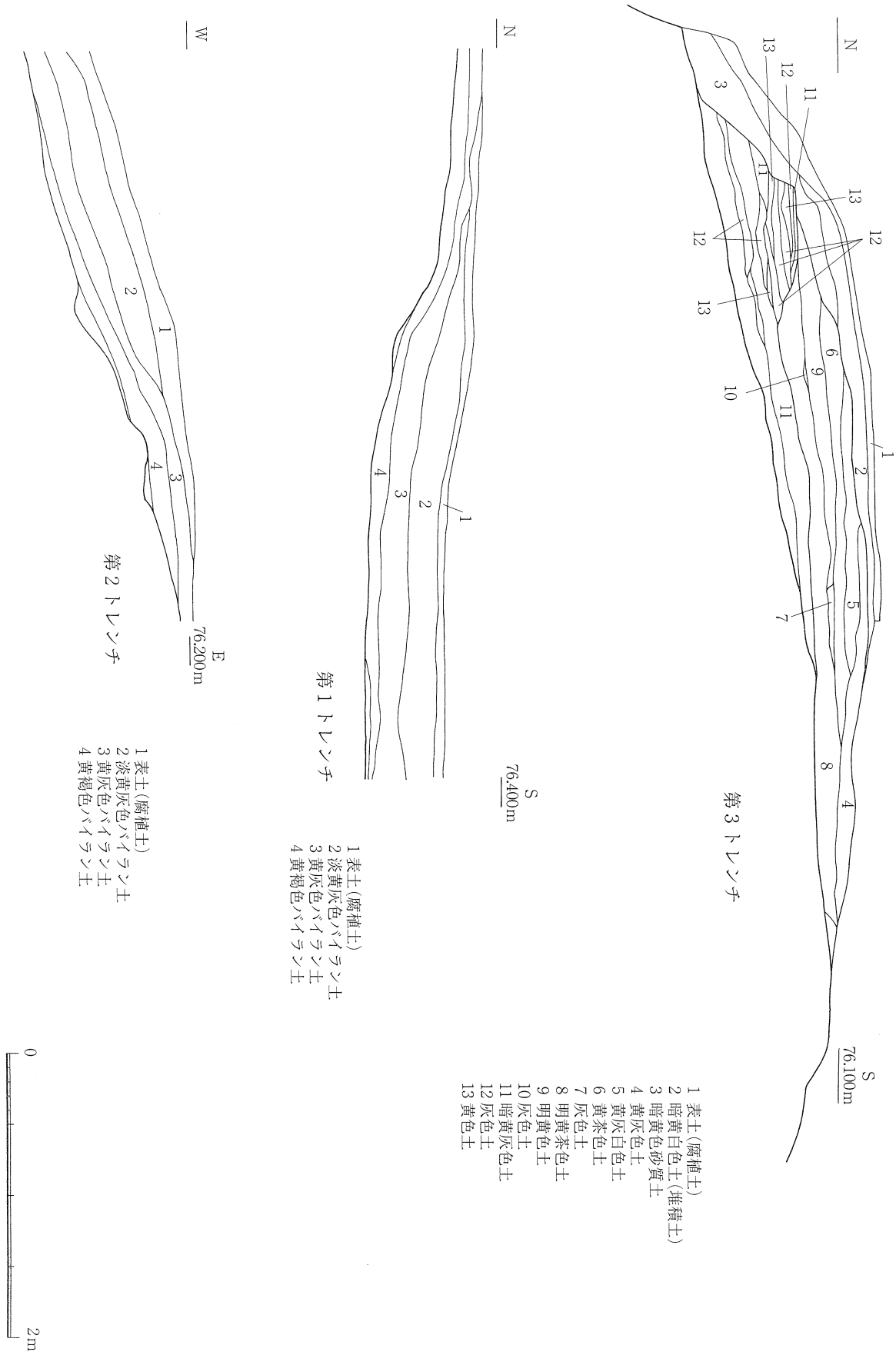
杯蓋（２～４）

２・３は口縁部の破片である。２は口縁部が緩やかに屈曲して下がる。端部は丸くおさめている。３は口縁部緩やかに屈曲してやや外傾する。４は丸い天井部にわずかに回転ヘラケズリが施される。口縁部との屈曲は不明瞭で、口縁部は丸くおさめる。

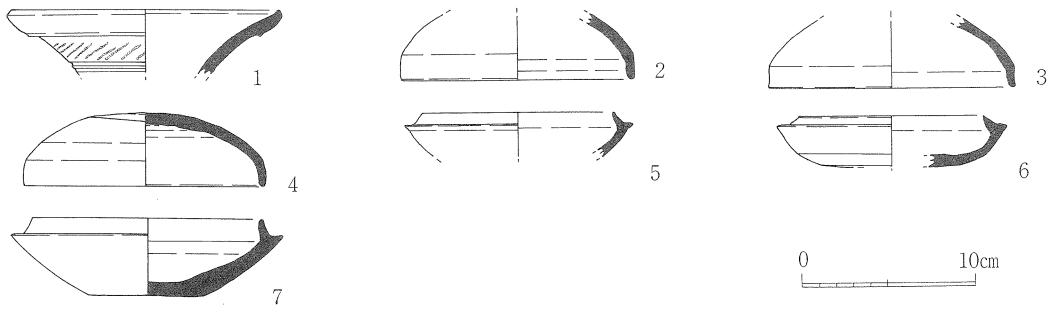
第４図　調査前現地状況図（Ｓ＝１／200）



第5図　遺構配置図（S＝1／200）



第6図　2号墳　断面図（S＝1／40）



第７図　２号墳　出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）

坏身（５～７）

５は口縁部の破片である。受け部は内傾して短く立ち上がる。６は器高が低く、小ぶりな坏身である。受け部は内傾して短く立ち上がる。７は平底のやや厚みのある坏身である。受け部はわずかに内傾して立ち上がる。

出土した坏身は器高が低いことが特徴に挙げられる。このことからTK209からTK217併行と考えられる。

第２節　３号墳の調査

３号墳は調査区南端に位置する。東側は崩落のため失われている。地表面から約0.2m掘り下げたところで遺構を検出した。不整方形の周溝と土坑３基を検出した。また、周溝外側でも土坑１基を検出した。

１．遺構（第８図）

周溝

周溝の平面形状は西南部に丸みを帯びたL字状を呈し、西側と東側は崩落により欠損している。最大幅1.6m、最小幅0.6mを測り、南側に緩やかな段を持って広がっている。深さは0.1m～0.4mを測る。この周溝は斜面部に形成されているため、東側から西側にかけて低くなっている。その比高差は約１mを測る。埋土は２層に分層でき、上層が暗黄色バイラン土、下層が黄褐色バイラン土である。周溝内からは拳大から人頭大の塊石が溝全体に渡って多く出土した。また塊石に混じって数点の遺物が出土している。

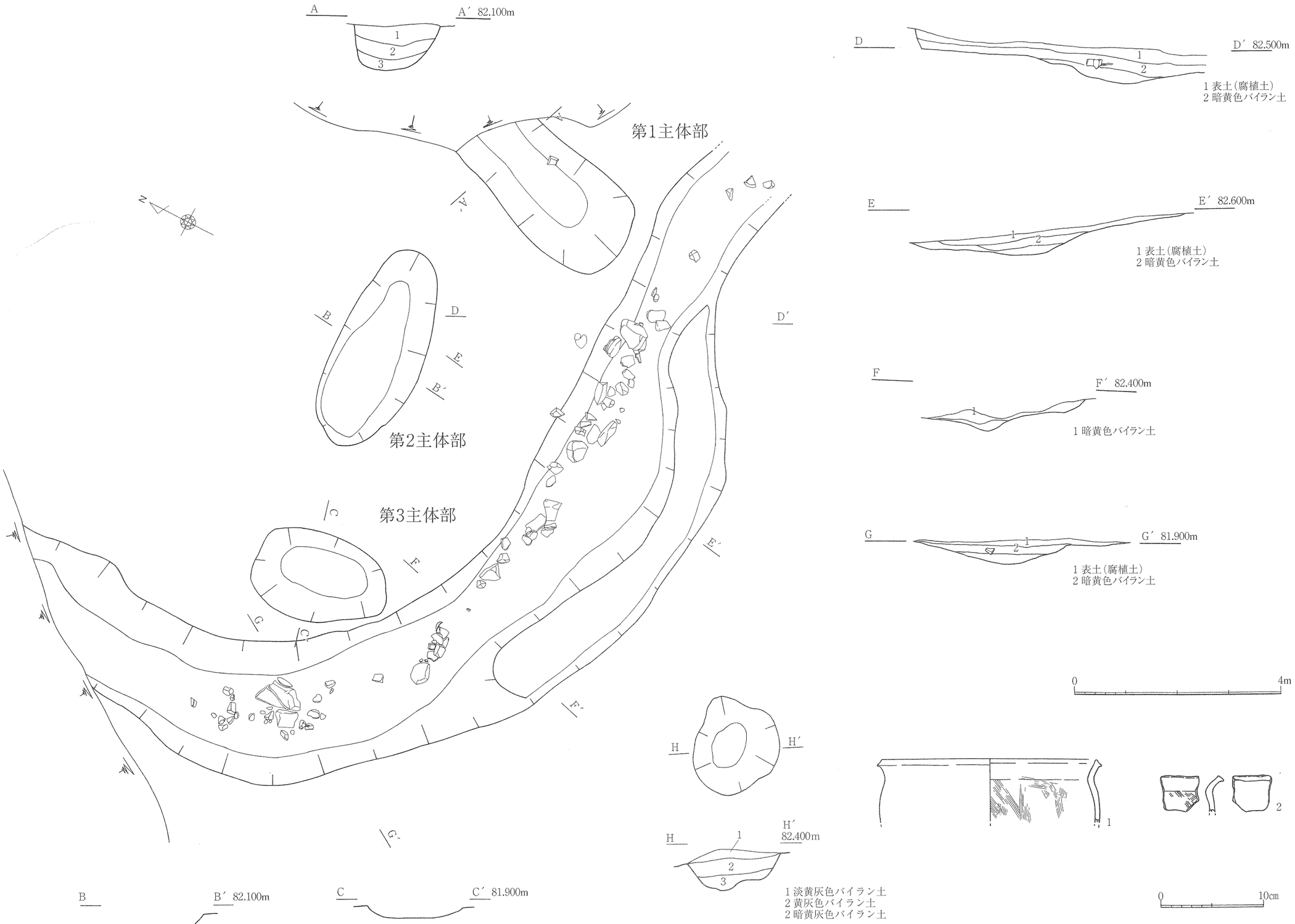
土坑

SK－01（第１主体部）

調査区南東端で検出した。東半分は崩落により失われていた。短軸0.8m、残存長軸1.8m、深さは0.4mを測る。N32°Eを主軸とする。平面形状は東半分が不明ではあるが、長楕円形を呈すると考えられる。埋土は３層に分層でき、上層は周溝埋土と同じ土で、最下層が暗黄灰色のバイラン土である。出土遺物は少量の土器片が出土したが図示できなかった。また周溝内出土と同様の塊石が１点出土している。

SK－02（第２主体部）

周溝の中心からやや南の位置で検出した。短軸0.9m、長軸21.0m、深さ0.3mを測る。N88°Eを主軸とする。平面形状は長楕円形を呈する。出土遺物は皆無であった。



第８図　３号墳　平面図及び遺構断面図（S＝１／40）、出土遺物実測図（S＝１／４）

SK－03（第３主体部）

周溝内南西部で周溝に接するように検出した。短軸0.9m、長軸1.4m、深さ0.3mを測る。N12°Wを主軸とする。平面形状は楕円形を呈する。出土遺物は皆無であった。

SK－04

周溝外の調査区南端で検出した。短軸、長軸とも0.4m、深さは0.4mを測る。平面形状は不整円形を呈する。埋土は３層に分層でき、SK－01と同様の堆積だった。出土遺物は皆無であった。

２．出土遺物（第８図）

周構内から出土した多量の塊石に混じって、少量の弥生土器が出土した。出土した遺物のうち、図化可能な２点を実測した。１は周構内、２は調査区東側崖下出土の遺物である。

鉢形土器（１・２）

１は緩やかに屈曲する頸部から上方に立ち上がり気味の口縁部となる。口縁端部は面取りし、内外にわずかに突出する。外面調整は不明であるが、内面はハケが施される。２は１に比べて口縁部の立ち上がりが開き気味になっている。

第4章　まとめ

今回の調査で確認した遺構は、方形周溝墓１基（３号墳）、円墳１基（２号墳）である。

３号墳は地滑りによって全容は不明であるが、南西部で最大幅1.6mの周溝を有する。その主体部は、墳丘の中心から外れた位置に３基築造している。周溝からは多数の拳大の塊石が出土している。周溝内の出土遺物から弥生時代終末期と考えられる。

この周溝墓は山大寺池西丘上古墳群の墓域を構成する嚆矢となっているもので、その後時代をおいて２号墳（１号墳）と築造されていく（註１）。しかし、これらの墓を構築した集団の居住域は発見されていない。

ここでは、三木町南部丘陵における弥生時代後期から終末期にかけての周溝をもつ墓を概観してみたい。当古墳群のすぐ東側に所在する西土居古墳群の中にも周溝墓が存在する。16・17・18号墓がそれで、時期は山大寺池西丘上３号墳よりもやや古く弥生時代後期である（註２）。

16号墓は丘陵先端部に位置し、方形の溝を巡らし、墳丘基底部には拳大～小児人頭大の塊石が整然と積まれている。偏って位置する主体部からは、３個体分の勾玉と約140個体分のガラス小玉が出土している。

17号墓は尾根線上に位置し、方形の周溝を持ち、隅が途切れている。周溝には拳大の塊石が多数出土しており、墳丘の貼り石の可能性が高い。主体部は偏在した１基のみで、他には存在していない。

18号墓も尾根線上に位置する。主体部を挟んで尾根を切るように周溝を開削している。尾根線に平行する溝は検出されていない。上記の16号墓、17号墓同様、拳大の塊石が多数出土している。

山大寺池西丘上３号墳を含めて、上記３基の周溝墓を比較すると、以下の事項が確認できる。

１．平面プランは共通するものはない。
２．周溝に拳大くらいの塊石が多数出土する。
３．主体部はすべて偏在している。
４．丘陵の尾根線を利用している。

１と４は造墓における選地に影響されているものと考えられる。尾根線を利用することで周囲を区画することがたやすく、それぞれの地形に合わせて開削する溝が決まってくるものと考えられる。２は西土居16号墓が好例で、いずれの墳墓も本来貼り石が成されていたのであろう。周溝から出土する塊石は、それが崩れて落ちたものと考えられる。ただし、西土居16号墓の報告に「積み石は部分的に完存している可能性もある」とあるように、墳丘基底部に２、３段の貼り石が成されているだけで、墳丘全体に及ぶものではないかもしれない。もちろん墳丘自体がその程度の高さである可能性もある。

３は地形の崩落により、確実とはいえないが、主体部が中心に位置するものは少ない（註３）。複次埋葬の可能性が高いが、なんらかの理由で単次埋葬になったものもあり、その理由は不明である。出土遺物が確認されたのも４例中１例のみである。しかしその１例（西土居17号墓）からは多数の副葬品が出土しており、他と隔絶している。

周辺での弥生時代前期から古墳時代にかけての墓制は、円形周溝墓と方形台状墓、土壙墓などがあげられる。特に方形台状墓は例が乏しく、数は少ない。山大寺池西丘上３号墳、西土居遺跡16、17

号墓、周辺をみるとさぬき市（旧寒川町）極楽寺墳墓群などがあげられる。いずれも丘陵上に立地している。円形周溝墓は、さぬき市（旧長尾町）森広遺跡ST－01やさぬき市（旧長尾町）陵遺跡ST－02、さぬき市（旧長尾町）尾崎西遺跡など平野部で検出されている。時期的な差異は、円形周溝墓が弥生時代前半から弥生時代終末期まで見られるのに対し、方形台状墓は弥生時代終末期を前後する時期に限定される。同時期に営まれるのは、階層、出自、集団間の違いによるものである。

主体部に関しては良好な類例が少ないが、丸亀市龍川五条遺跡ST－02や高松市空港跡地ST－10では木棺墓が検出されている。また、土壙墓や土器棺墓もこれら周溝を有する墓制と併行して営まれている。

山大寺池西丘上２号墳は盛土中から出土した遺物などから（TK209～TK217併行＝古墳時代後期）であると考えられる。土砂の崩落により主体部は流出したものと考えられ、基底部と盛土の堆積状況を確認した。また、同丘陵では横穴式石室をもつ円墳が数基確認されている。山大寺池周辺にも山大寺池北丘上古墳や諏訪カンカン山古墳群があるが、諏訪カンカン山古墳の１基のみ７世紀の横穴式石室が確認されている。

註１　同丘陵で確認されている古墳は３基あり、さらに存在していたが(『木田郡史』によると14基確認されている。)、後世の削平により消滅した。

註２　18号墳からは遺物は出土していない。時期は報告書に従った。

註３　18号墓の南側の溝は検出されておらず、墓域は推定の範囲であるため主体部は中心にくるかどうかは不明。

参考文献

松田重治　二神（田所）希代江　『西土居遺跡群』　2003　三木町教育委員会
三木町史編集委員会『三木町史』　1988　三木町
阿河鋭二『陵遺跡』　1999　長尾町教育委員会
片桐節子『極楽寺墳墓群』　1998　寒川町教育委員会

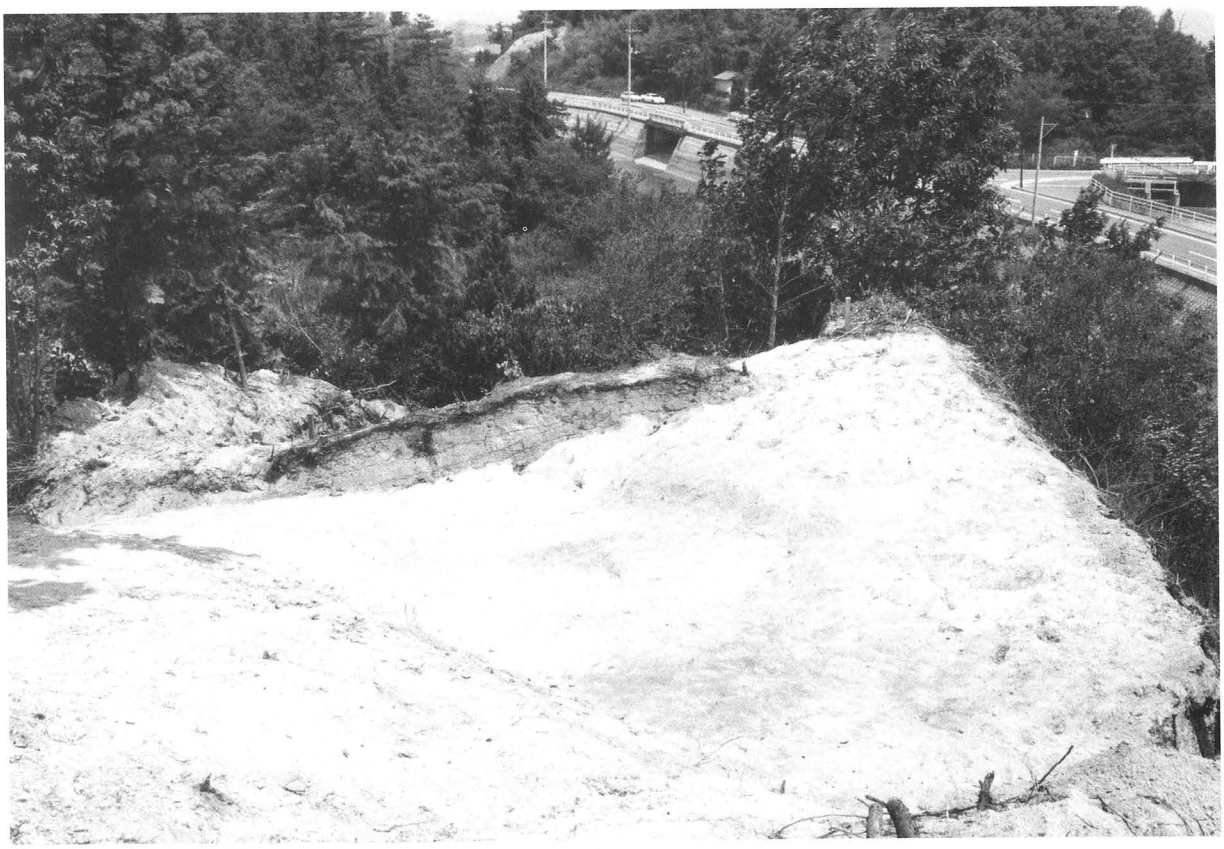
遺　物　観　察　表

図版番号	遺物番号	調査区	遺構名	分類	器種	現存部位	残存率	法量(cm)			成形および調整技法(外面／内面)	色調(外面／内面)	胎土	焼成	備考
								口径	器高	底径					
7	1	2号墳		須恵器	瓶	口縁部	1／6	15.2	(3.5)	—	回転ナデ／回転ナデ	灰色(2.5Y 6／1) 灰色(2.5Y 6／1)	密	堅緻	
7	2	2号墳	調査後造成土出土物	須恵器	坏蓋	口縁部	1／5	13.2	(4.5)	—	回転ナデ／回転ナデ	灰色(2.5Y 7／1) 灰色(2.5Y 7／1)	精良。1～3㎜の砂粒若干含む。	堅緻	
7	3	2号墳	調査後造成土出土物	須恵器	坏蓋	口縁部	1／8	14.2	(4.7)	—	回転ナデ／回転ナデ	暗灰(2.5Y 6／1) 暗灰(2.5Y 6／1)	精良。1～2㎜の砂粒若干含む	堅緻	
7	4	2号墳	調査後造成土出土物	須恵器	坏蓋	ほぼ完形	4／5	13.8	4.2	—	回転ナデ・ヘラ削り／回転ナデ	灰色(2.5Y 6／1) 灰色(2.5Y 6／1)	精良。1～2㎜の砂粒やや多く含み、4㎜の砂粒を若干含む	堅緻	天井部分のケズリ未調整。
7	5	2号墳	調査後造成土出土物	須恵器	坏身	口縁部	1／4	11.0	(2.5)	—	回転ナデ／回転ナデ	灰色(2.5Y 6／1) 灰色(2.5Y 6／1)	精良。1～2㎜の砂粒若干含む	堅緻	
7	6	2号墳	調査後造成土出土物	須恵器	坏身	ほぼ完形	1／2	10.6	(2.9)	—	回転ナデ・回転削り／回転ナデ	灰色(2.5Y 6／1) 灰色(2.5Y 6／1)	精良。1～2㎜の砂粒少量含む	堅緻	
7	7	2号墳	調査後造成土出土物	須恵器	坏身	ほぼ完形	1／4	13.0	4.4	6.6	回転ナデ・削り・ヘラ削り／回転ナデ	灰色(2.5Y 7／1) 灰色(2.5Y 7／1)	精良。1～2㎜の砂粒やや多く含む	堅緻	
8	1	3号墳	3号墳NO.4	弥生土器	鉢	口縁部	1／5	20.8	(6.2)	—	摩滅／ナデ・ハケ	にぶい黄橙色(10YR7／8) 浅黄色(2.5Y 7／3)	1～3㎜の砂粒、やや粗い	良好	
8	2	3号墳	東側地滑り崖下	弥生土器	鉢	口縁部	—	—	(3.5)	—	摩滅／ナデ・ハケ	黄橙色(10YR 7／8) 黄橙色(10YR 7／8)	1㎜の砂粒若干含む。精良	良好	

写　真　図　版

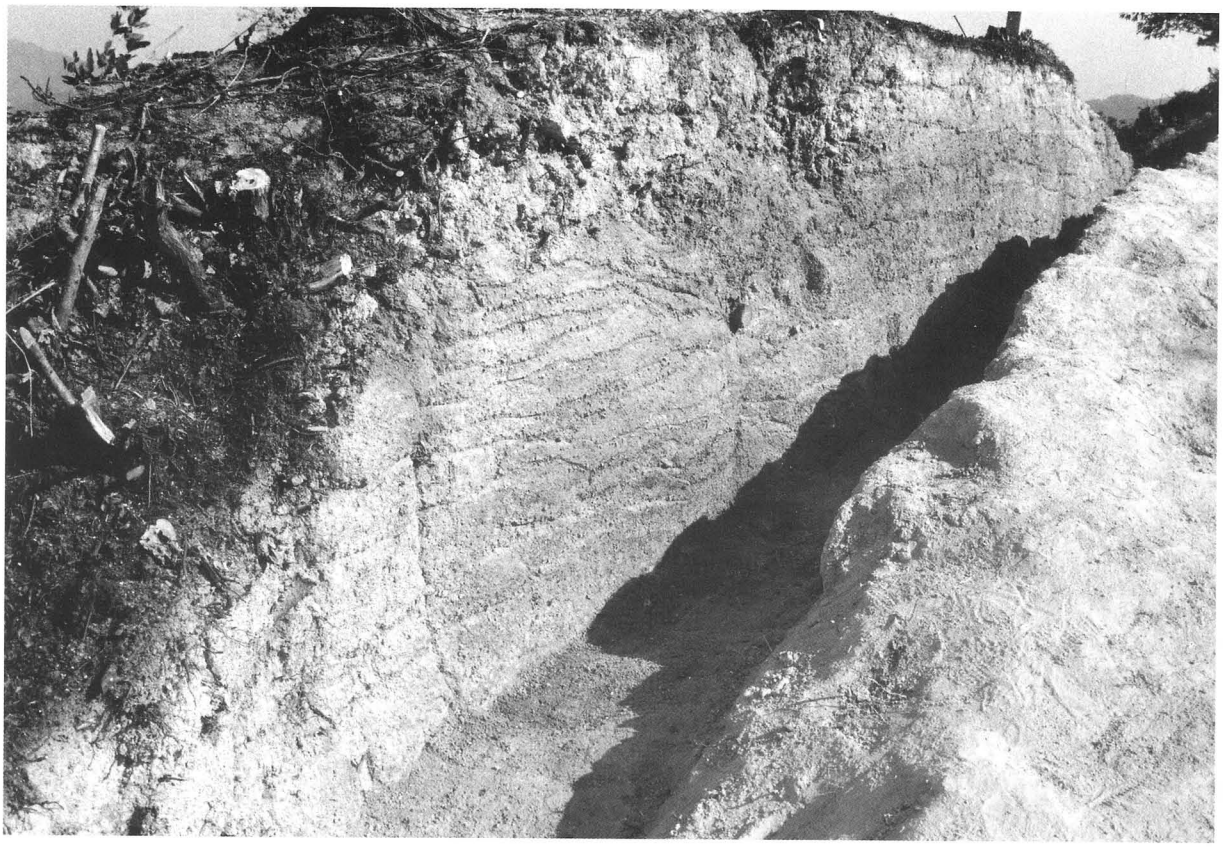
図版 1

調査前状況　北より



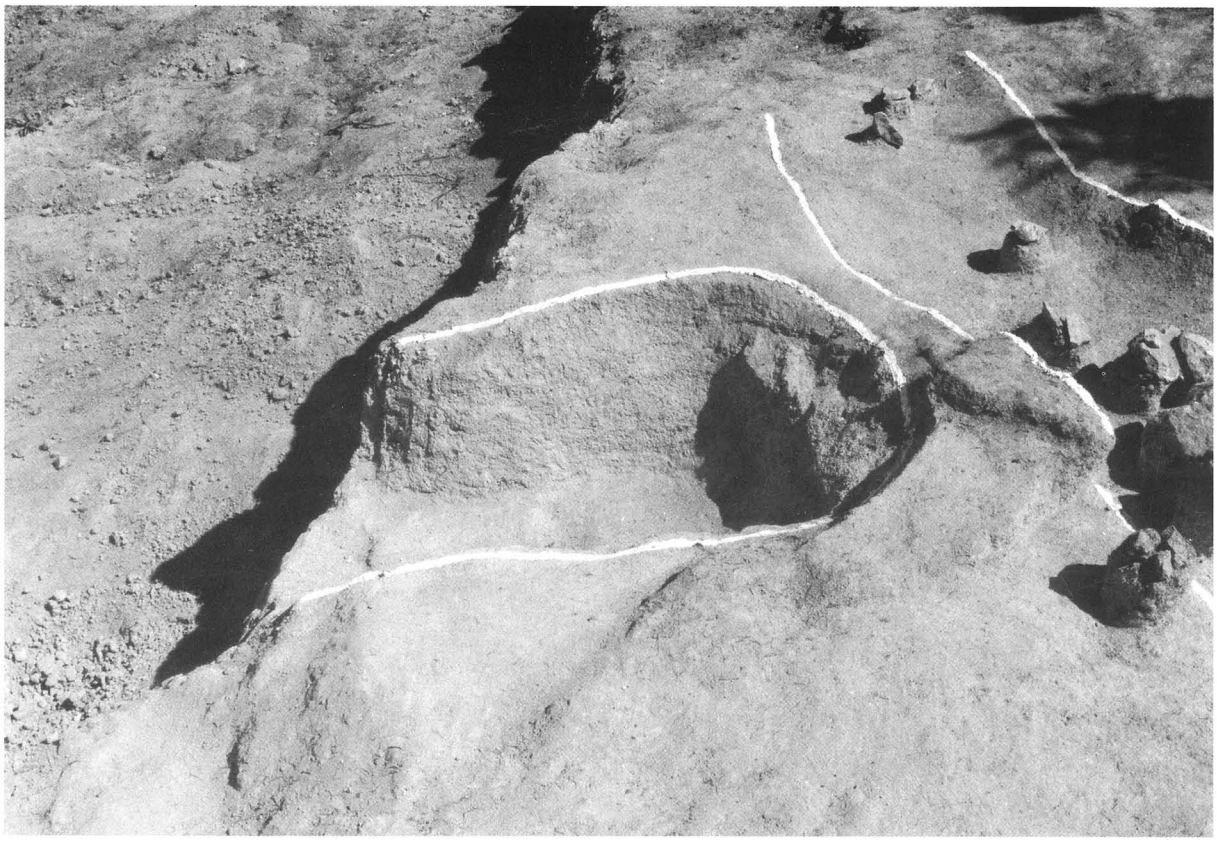
2 号墳近景

図版 2

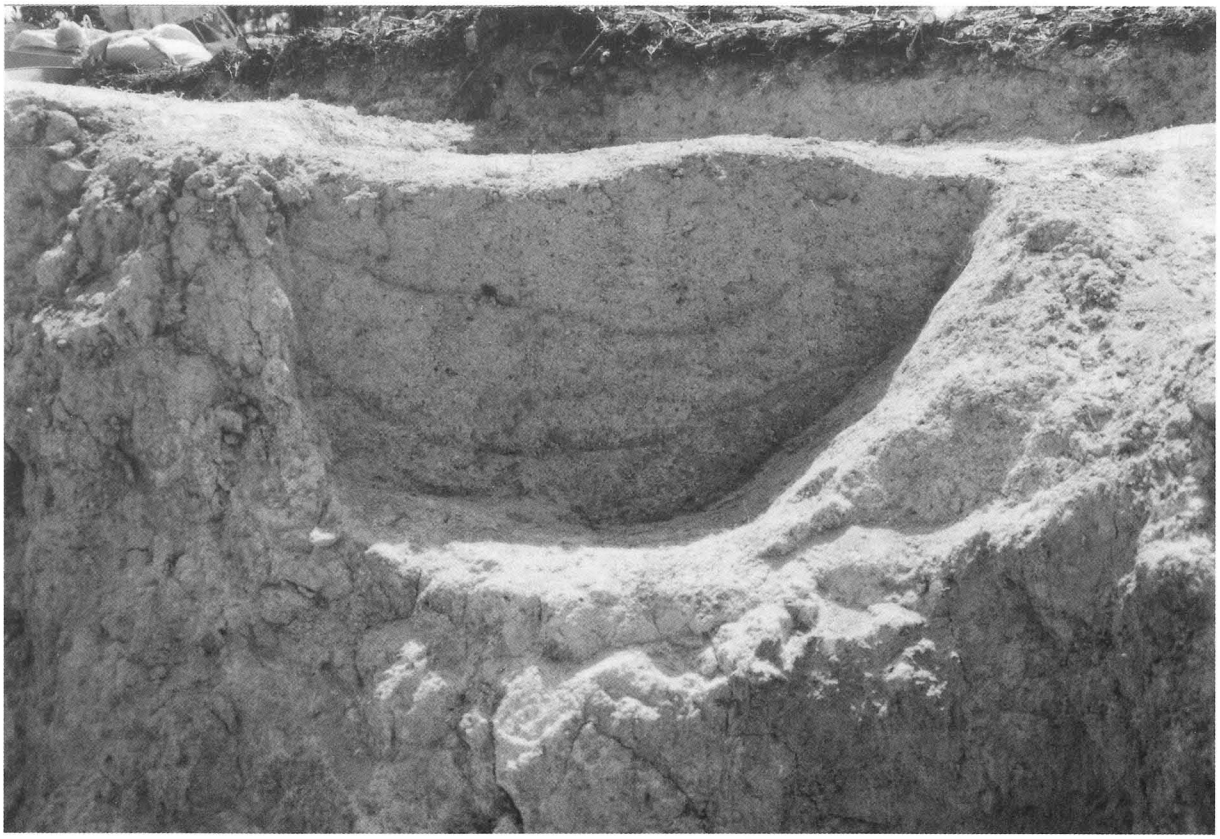


2 号墳盛土土層断面

3 号墳周溝検出状況

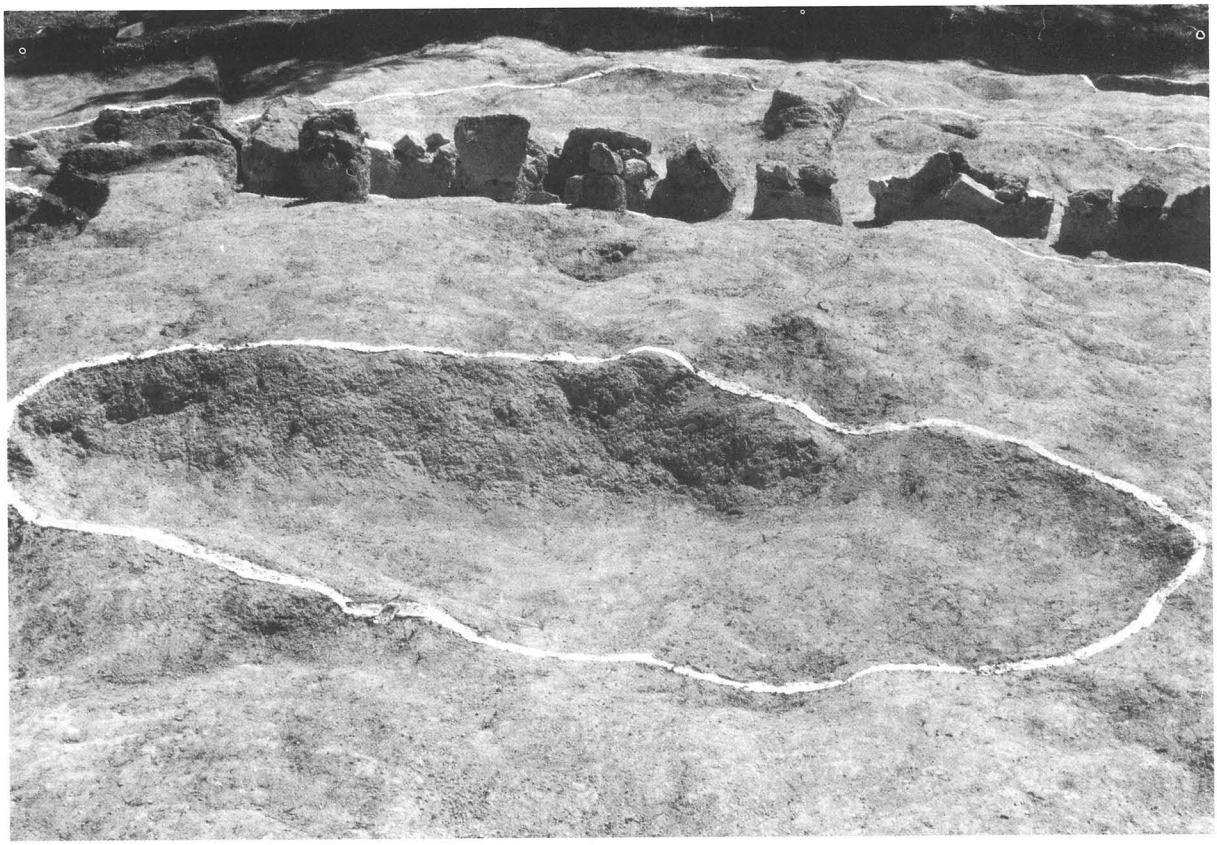


3 号墳SK－01（第 1 主体部）完掘状況

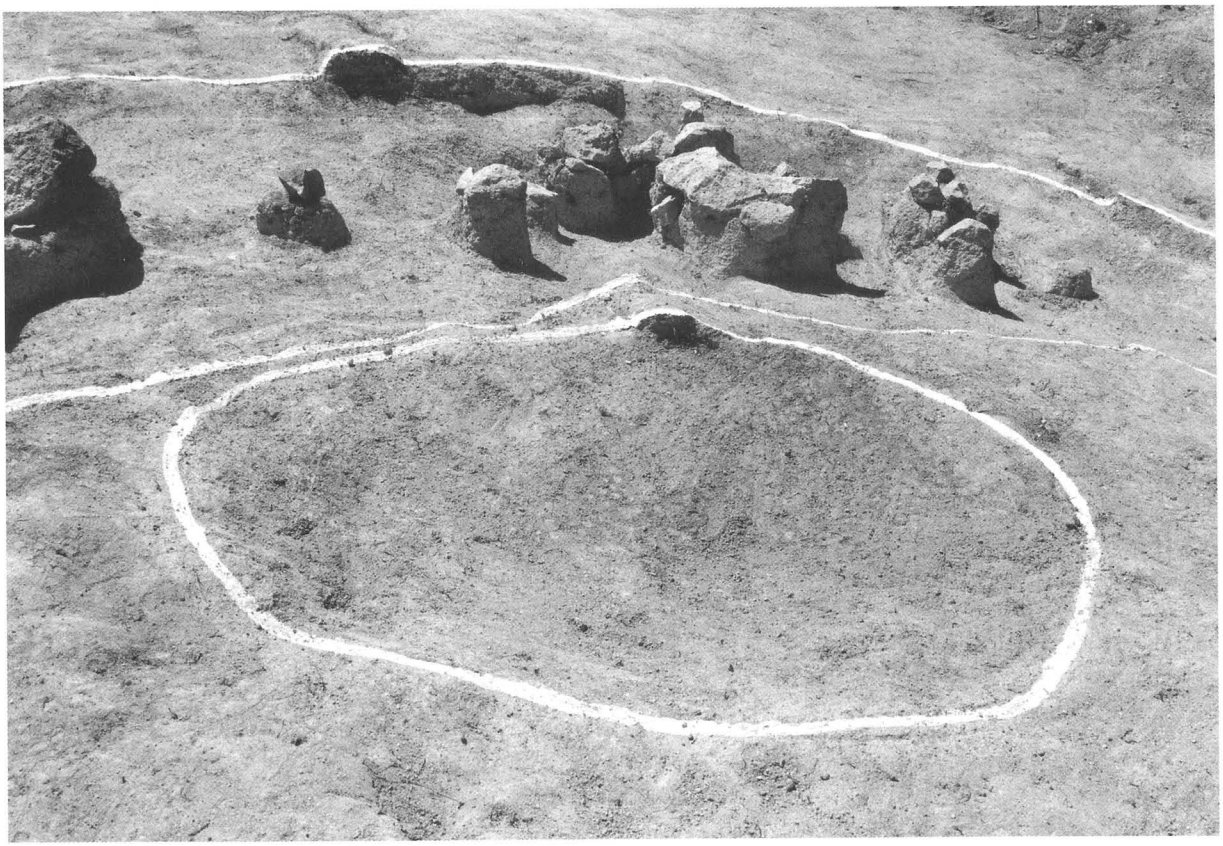


3 号墳SK－01（第 1 主体部）土層断面

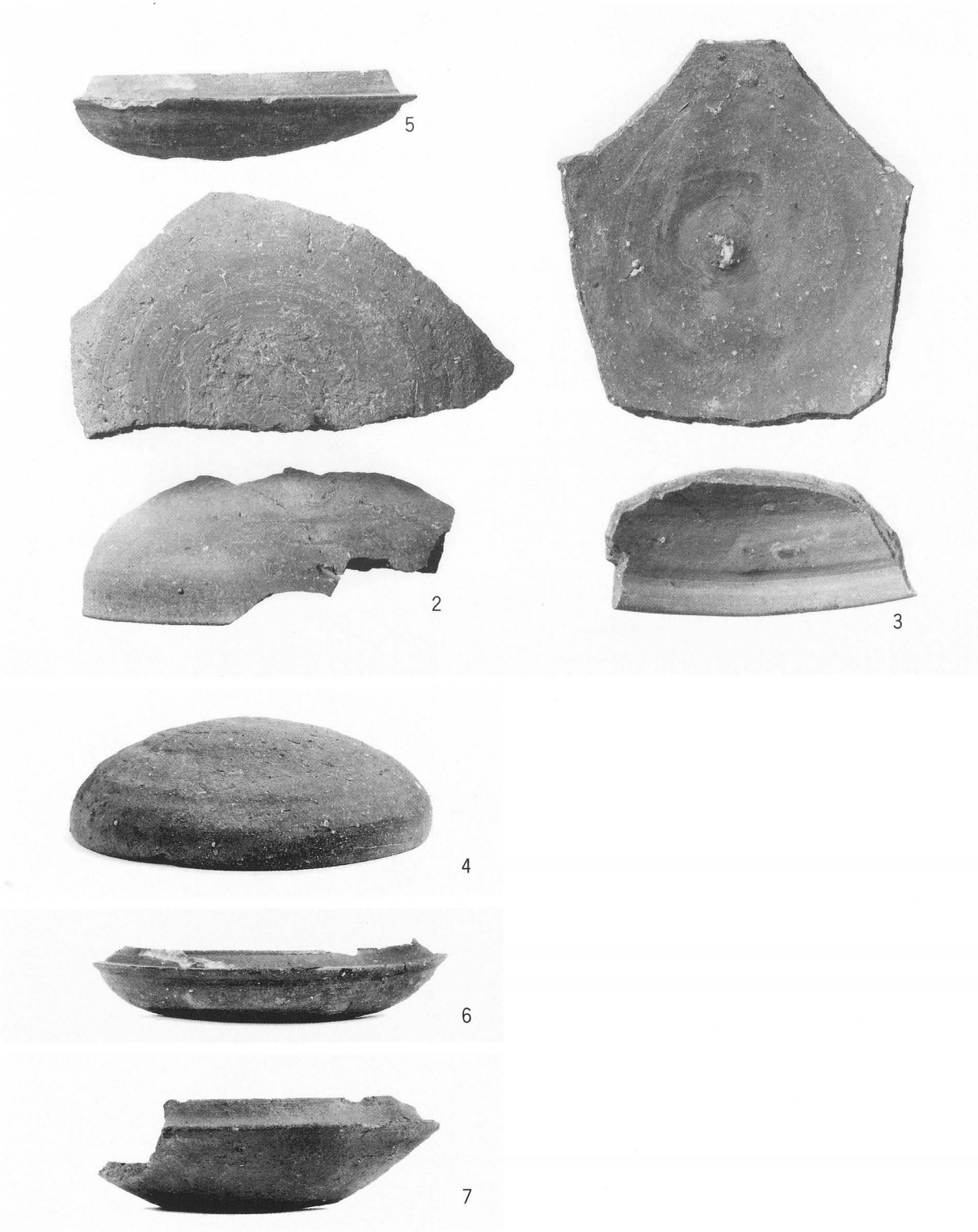
図版 4



3 号墳SK－02（第 2 主体部）完掘状況



3 号墳SK－03（第 3 主体部）完掘状況



出 土 遺 物

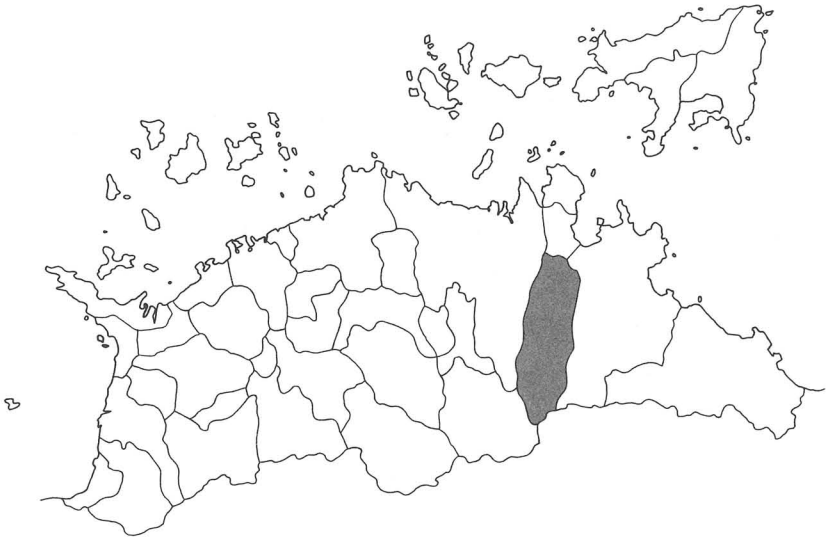
南　天　枝　遺　跡

第１章　調査に至る経緯

旧主要地方道高松長尾大内線（旧県道10号線）は、高松市から木田郡三木町、さぬき市を経て東かがわ市で国道11号に合流する全長28kmの東讃地域の主要幹線道路である。しかし近年、頻繁に交通渋滞が起こるようになったため、本路線のバイパス（約22km）を建設することになり、昭和51年のさぬき市（旧寒川町）布勢遺跡、平成４年のさぬき市（旧長尾町）尾崎西遺跡、平成６年の高松市十川東・平田遺跡の発掘調査が実施された。当町においても、平成８・９年に尾端遺跡で発掘調査が行われた。平成８年には南天枝遺跡が調査され、古墳時代前期、古墳時代後期末から奈良時代初頭、鎌倉時代から室町時代前半、室町時代後半から江戸時代後半にかけての遺構、遺物が多数検出された。

平成８年に地元の土地所有者から南天枝遺跡に北隣する民有地の地下げをしたいとの要望があり、関係機関との協議を重ねた結果、三木町教育委員会は同年12月11日に試掘調査を実施した。調査の結果、事業予定地にも遺構、遺物を検出し、遺跡が展開していると判断したため、保護措置を必要とする460m²について発掘調査を実施し、記録保存することとなった。

発掘調査は三木町教育委員会が調査主体となり、平成９年２月13日から同年３月31日まで実施した。



第9図　三　木　町　の　位　置

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

三木町は香川県木田郡の南部に所在する。行政区分では東西南北にそれぞれ、さぬき市、高松市、木田郡牟礼町、香川郡塩江町・徳島県美馬郡脇町と接する。地形的には北は標高２～300mの立石山地、南は標高５～900mの阿讃山脈に囲まれている。南の阿讃山脈に源を発する吉田川・新川は北流して、三木町中央部に沖積平野を形成する。そして西方の高松平野へと至る。

第２節　歴史的環境

南天枝遺跡の所在する三木町は、近年の発掘調査により多くの発見がなされている。

旧石器時代については、主とした遺跡は存在していない。しかし七ツ塚古墳群からサヌカイト製翼状剥片が、池戸八幡神社古墳群の丘陵南端の切り通しから小型ナイフ形石器片が出土している。

縄文時代については南天枝遺跡の小流路と考えられる地点から縄文時代晩期の浅鉢が１点出土しているのみである。町周辺では高松市十川東・平田遺跡から縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土している。

弥生時代については、著名な遺跡遺物が知られていたが、近年の発掘調査で少しずつその詳細が判明するようになってきた。弥生時代前期では、多量の土器包含層が確認された農学部遺跡や福万遺跡などがあげられる。これらの遺跡では、前期中葉までは確認されていないが、後葉以降の土器が多量に出土している。弥生時代中期では、鹿伏・中所遺跡で集落が確認されている。中期末になると西浦谷遺跡、白山３遺跡などの高地性集落に移っていく。後期は集落域が平野全体に広がり、西浦谷遺跡、池戸鍋渕遺跡、砂入遺跡、鹿伏・中所遺跡、田中南原遺跡などが数えられる。鹿伏・中所遺跡では、竪穴住居が70棟、掘立柱建物が20棟検出されており、他に比較して遺跡規模が大きい。当時期の中核的集落と考えられる。また、全体の規模は不明だが、田中南原遺跡も検出した住居跡数は多く、中核集落となりうる存在である。墳墓資料に関しては、弥生時代中期後半から古墳時代初頭の遺跡が多く、中期では、丘陵上に土壙墓や壺棺墓が営まれる白山３遺跡、天神山古墳群、西土居遺跡群などがあげられる。後期後半から終末期になると土器棺墓をもつ丸岡Ａ・Ｂ墳墓群や石塚古墳群に加えて、山大寺池西丘上３号墳や西土居遺跡群で丘陵上に方形台状墓が形成されるようになる。また天満遺跡は、弥生時代終末期の墳丘墓であると考えられる。

古墳時代については、町内唯一の前方後円墳である池戸八幡神社１号墳が古墳時代前期初頭の所産と考えられている。全長約38m、後円部径約20mを測り、柄鏡状を呈する。古墳時代中期後半から三木町の古墳の造成が活発となる。権八原古墳群は５世紀後半に比定される古式群集墳である。組み合わせ箱式石棺を主体部とする、円墳などを９基検出している。６世紀前半には町南部の独立丘陵上に築造された堀切１号墳がある。竪穴式石室を主体部にもつ直径14.5mの円墳で、円筒埴輪の出土が知られている。また七ツ塚古墳群や西土居古墳群などの群集墳が存在する。６世紀後葉から町内の古墳に横穴式石室が採用されはじめ、７世紀から活発化する。町南部では、山大寺池西丘上２号墳、蛇ノ角古墳群、諏訪カンカン山古墳群など丘陵ごとに数基から10数基が群集している。また、大型の横穴式石室をもつ龍現社古墳も町南部の丘陵に位置する。町北部では椿社古墳や風呂谷古墳など単独で築かれるという特徴がある。

古代については、律令体制にともなう条里が区画され、三木町中央には南海道の存在が推定され

ている。白鳳期以降に建立された始覚寺跡、香蓮寺跡、上高岡廃寺跡、長楽寺跡などの古代寺院が存在し、近年試掘調査の行われた始覚寺跡では、寺域に北接して4基の瓦陶兼業窯が存在し、寺院に供給されていたと考えられる。また、寺域もほぼ1町四方であることも確認されている。7世紀頃の集落では、吉田川水系に所在し、南天枝遺跡と隣接する尾端遺跡があり、同水系上流に所在する長楽寺跡との関係も指摘されている。また北方丘陵には小谷窯跡が所在し、7世紀を中心に須恵器生産を行っていた。

中世については、三木町は管領細川頼之の四国支配の時代の後、守護代安富氏の統治となる。安富氏は東讃地域の守護代であったが、領域内に香西氏・寒川氏・植田氏などの諸勢力を抑えきれず、三木郡内にのみその影響力がおよんでいた。戦国時代になると、三木城を中心として勢力を誇っていた三木氏が途絶え、安富氏が代わって三木郡を支配するようになった。しかし長宗我部氏の讃岐侵攻時には、東讃においては十河城に拠点をおく十河氏のみが強大で、安富氏も十河氏とともに侵攻に対抗した。平木城を中心に戦火は激しかったという。他にも町内には串田城、池戸城などの城跡がのこる。

参考文献
三木町　1978『三木町史』
松田重治・二神希代江　2003『西土居遺跡群』三木町教育委員会
西村尋文編　2003『寺田・産宮通遺跡　南天枝遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
松本敏三編　1975『権八原古墳群発掘調査概報』国立医科大学候補予定地内埋蔵文化財発掘調査団

1 南天枝遺跡
2 山大寺池西丘上１・２・３号墳
3 田中南原遺跡
4 諏訪カンカン山古墳
5 西土居遺跡群
6 剣山古墳
7 天満遺跡
8 西山古墳
9 天満古墳
10 高木古墳
11 八王子古墳
12 白山１遺跡
13 白山２遺跡
14 白山３遺跡
15 天神山古墳群
16 串田城跡
17 福万遺跡
18 山大寺跡
19 中坪城跡
20 旧長楽寺跡
21 鹿伏・中所遺跡
22 堀切古墳群
23 蛇の角古墳群
24 丸岡Ａ墳墓群
25 丸岡Ｂ墳墓群
26 石塚Ａ古墳群
27 石塚Ｂ古墳群
28 石塚古墳群
29 勝負谷古墳
30 山大寺池北丘古墳

第10図　周辺の遺跡（Ｓ＝１／25000）

第３章　調査の成果

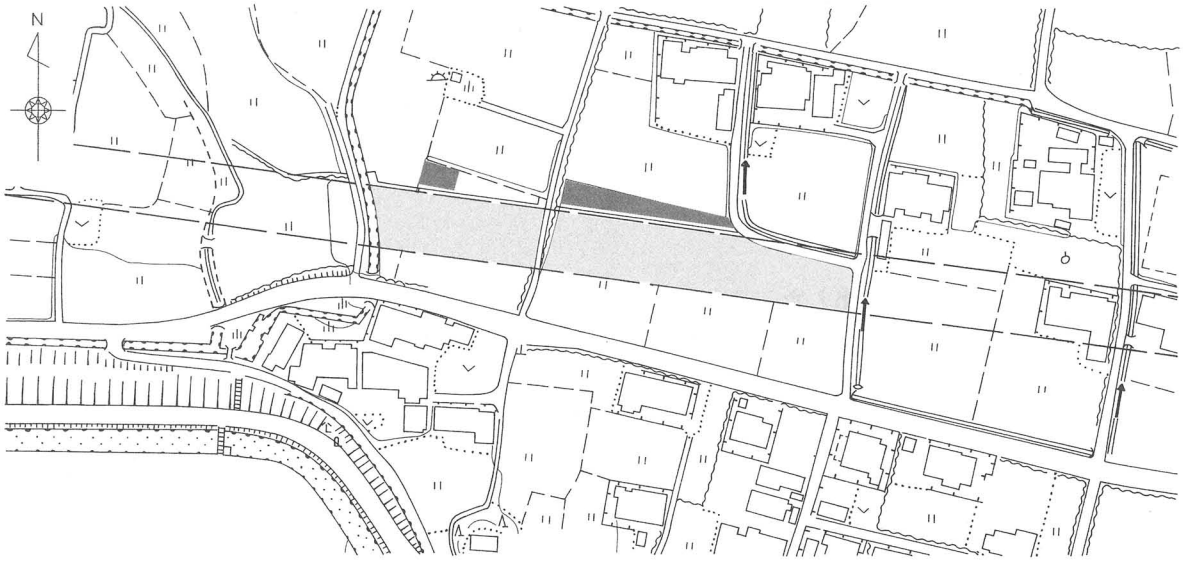
第１節　調査区

南天枝遺跡は、三木町南部の阿讃山地から北流する吉田川が中央平地に至って進路を西方に転換する地点の左岸の沖積地上に位置する。遺跡の南西に位置する蓮池周辺は低位段丘をなしているため、当遺跡はそれよりもやや標高が低い。調査区は南接する平成８年度、(財) 香川県埋蔵文化財調査センターによる調査（以下県調査、県報告と略す）で使用したグリッド杭を基準に７m北に平行して設定し、東側の調査区をⅠ区、西側の調査区をⅡ区とした。

第２節　基本層序

南天枝遺跡の立地する沖積地は、浅い谷状の地形が入り組んでいることが確認されている。(県報告）その谷状地形が埋没した段階で中近世の生活面が形成されている。東西に長い調査区において、所々でその状況が確認できる。

当遺跡の層序は大きく４層に分かれる。Ⅰ層が表土・耕作土、Ⅱ層が暗灰褐色砂質土（中近世包含層)、Ⅲ層が灰褐色砂質土（谷上地形埋土)、Ⅳ層が黄褐色シルト（地山）である。遺構検出面は場所により前後するがⅢ層上面及びⅣ層上面で検出した。検出高はT.P27.9～27.8mである。



第11図　調査区位置図（Ｓ＝１／500）

第３節 遺構・遺物

１．竪穴住居

SH－01（第13図、図版６、７）

Ⅰ区中央の調査区南端で住居の約１／４を検出した。県報告のSH-01と連続するものである。平面形状は隅丸方形を呈し、長軸4.8m×短軸4.6m、深さ0.4mを測る。住居址北側に造りつけの竈をもち、幅1.3m、長さ1.2mを測る。県報告でも「竈の残骸と考えられる」炭・焼土の広がりを確認しており、一体のものであったと考えられる。主柱穴は県報告の柱穴１基を再度掘削し、新たに１基を検出した。県報告の３基の柱穴と合わせて、４本主柱穴を確認することができた。柱穴の平面形状はすべて略円形で、それぞれ径0.3～0.4m、深さ0.3～0.4mを測る。

出土遺物（第19図１～３、図版12、13）

須恵器、土師器が少量出土した。

１は坏蓋の口縁部である。口縁端部が水平にわずかに開く。２・３は土師器甕の口縁部である。３は口縁端部を面取りしている。胴部内面には横方向のハケが施される。

出土した遺物は古代前半と考えられる。尚、県報告も古代前半（７世紀前半）の遺物が少量報告されている。

SH－02（第14図、図版７）

Ⅰ区のSH-01の北西で調査区外に拡がる形で住居の約１／２を検出した。平面形状は隅丸方形を呈し、１辺5.8m、深さは0.5mを測る、やや大型の住居である。住居址の周囲には壁溝が設けられ、南東部に途切れるところがあるが、ほぼ全周する。周溝幅は0.2m、深さ0.1mを測る。主柱穴と考えられる２基のピットを確認した。その他、浅い落ち込み状の土坑を７基確認した。

出土遺物（第19図４、図版12）

須恵器坏蓋が出土した。天井部を欠損している。天井部１／５にケズリ痕がのこる。明確な稜を持たず口縁部につながる。口縁端部は丸くおさめている。TK217併行と考えられる。

２．掘立柱建物

SB－01（第15図、図版８）

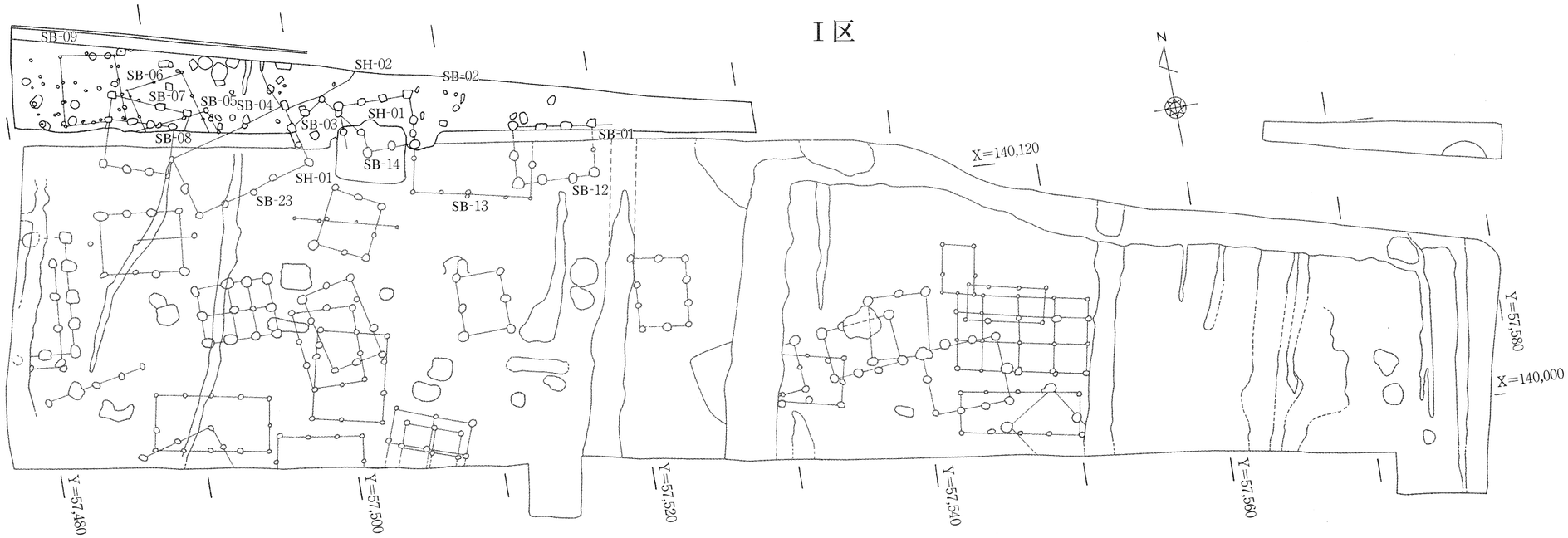
Ⅰ区東の調査区南端で検出した。それぞれの柱穴は平面略円形や方形で径約0.6m～0.8m、深さ0.15～0.25mの柱穴を３基確認した。県報告ではこれに対応する掘立柱建物（SB-12）を検出しており、合成・復元したものが第15図となる。復元した建物は２間×３間となる。建物の主軸方位はN90°Eを測る。出土遺物は皆無であり、県報告でも遺物の出土は報告していない。

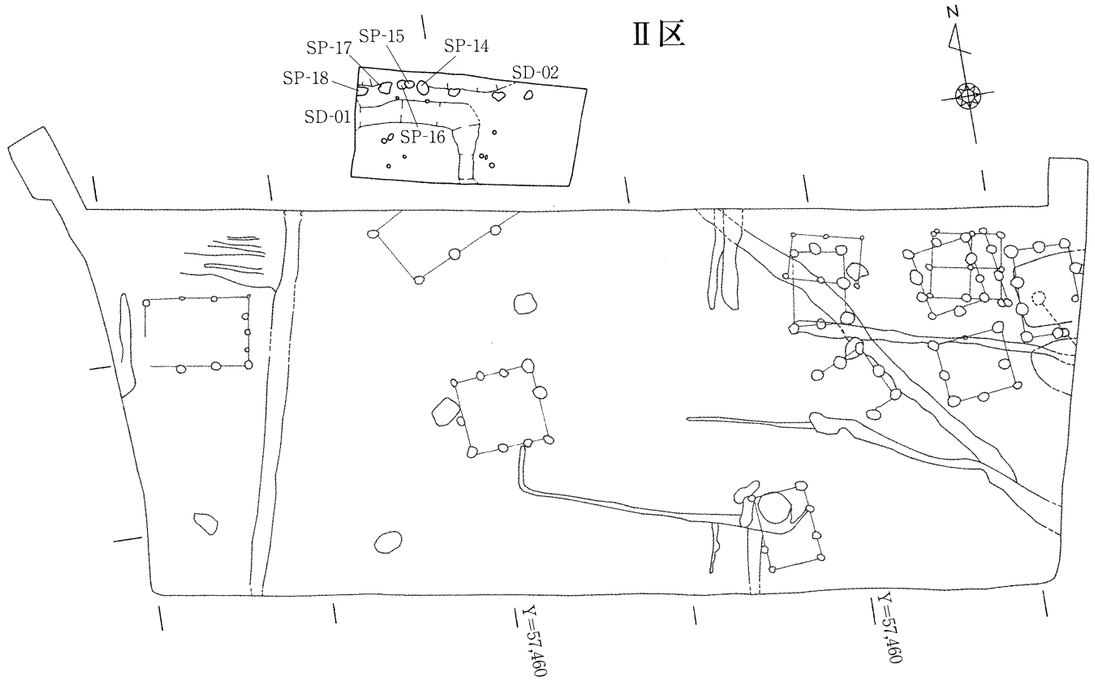
SB－02（第16図、図版８、９）

Ⅰ区中央、SH-01と重なるように検出した２間×３間の掘立柱建物で、SH-01と切り合い関係にある。それぞれの柱穴は平面略円形や方形で、直径は0.5～0.8m、深さは0.25～0.3mを測る。すべての柱穴で柱痕を確認した。県調査ではこれに対応する掘立柱建物（SB-14）を検出しており、合成・復元したものが第16図となる。建物の主軸方位はN88°Eを測る。

出土遺物（第19図５・６、図版12）

遺物はSP-111・114の柱痕上で須恵器瑳（５）、高坏（６）が出土している。５は瑳である。胴部は球形を呈し、それに繋がる頸部はやや細くしまる。口縁部を欠損する。胴部中央に１条の沈線が巡る。孔の周辺部がはがれるように欠損している。６は高坏である。坏部を欠損する。どちらもTK217併行と考えられる。

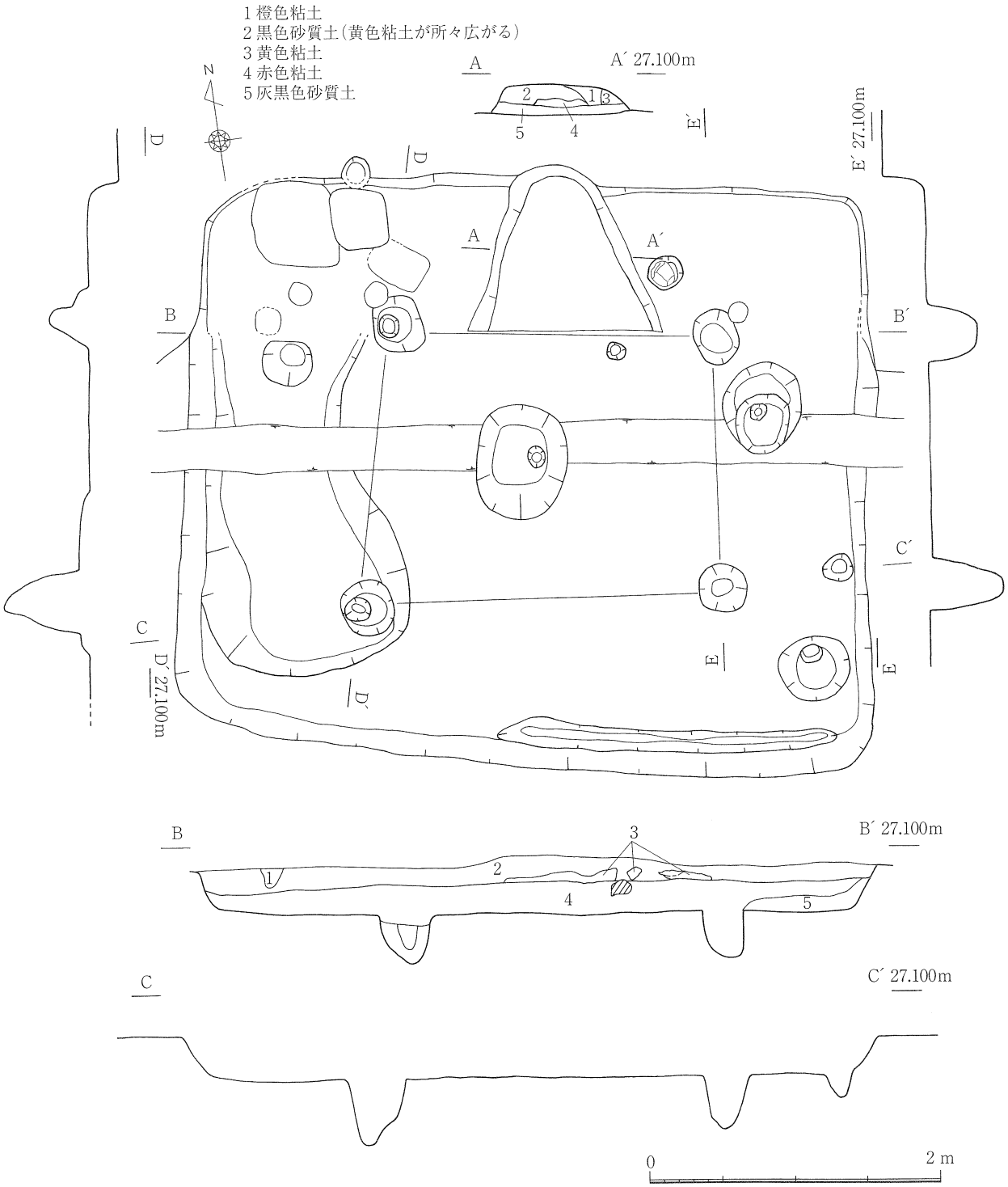




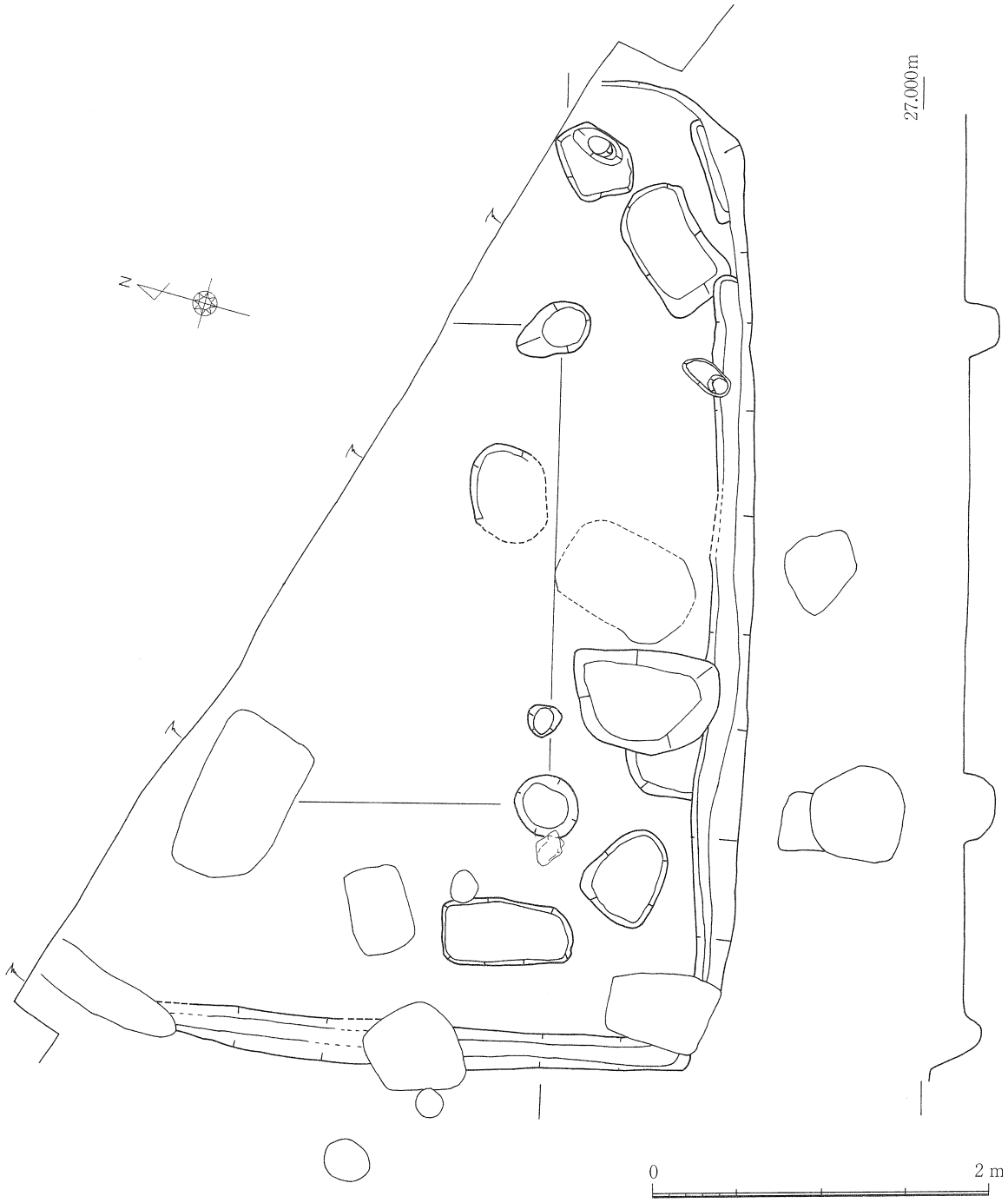
第12図　遺構配置図（S＝１／400）

※トーンを落としている地区は、平成８年度の(財)香川県埋蔵文化財調査センター調査区

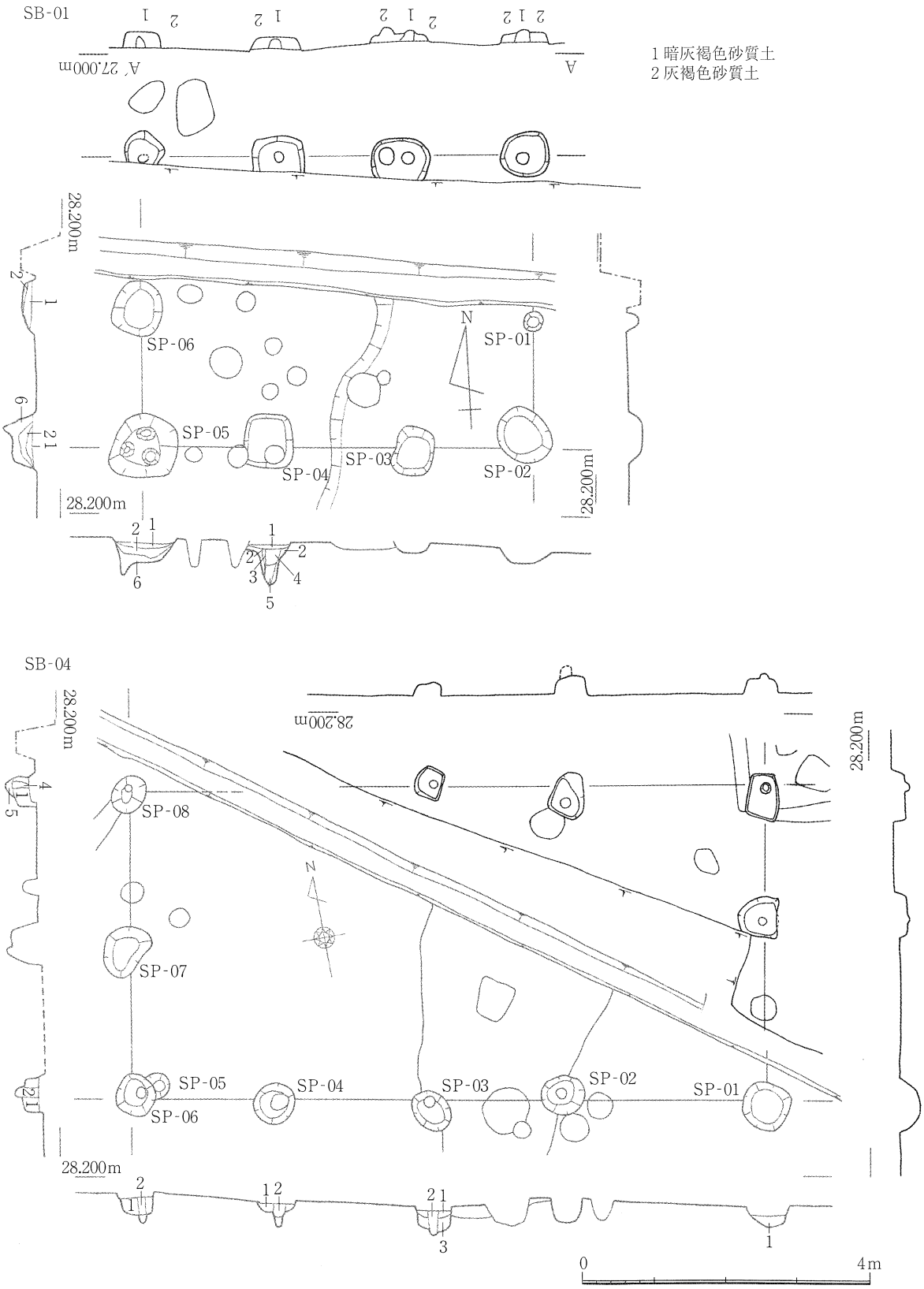
0　80m



第13図　SH－01遺構図（S＝1／40）

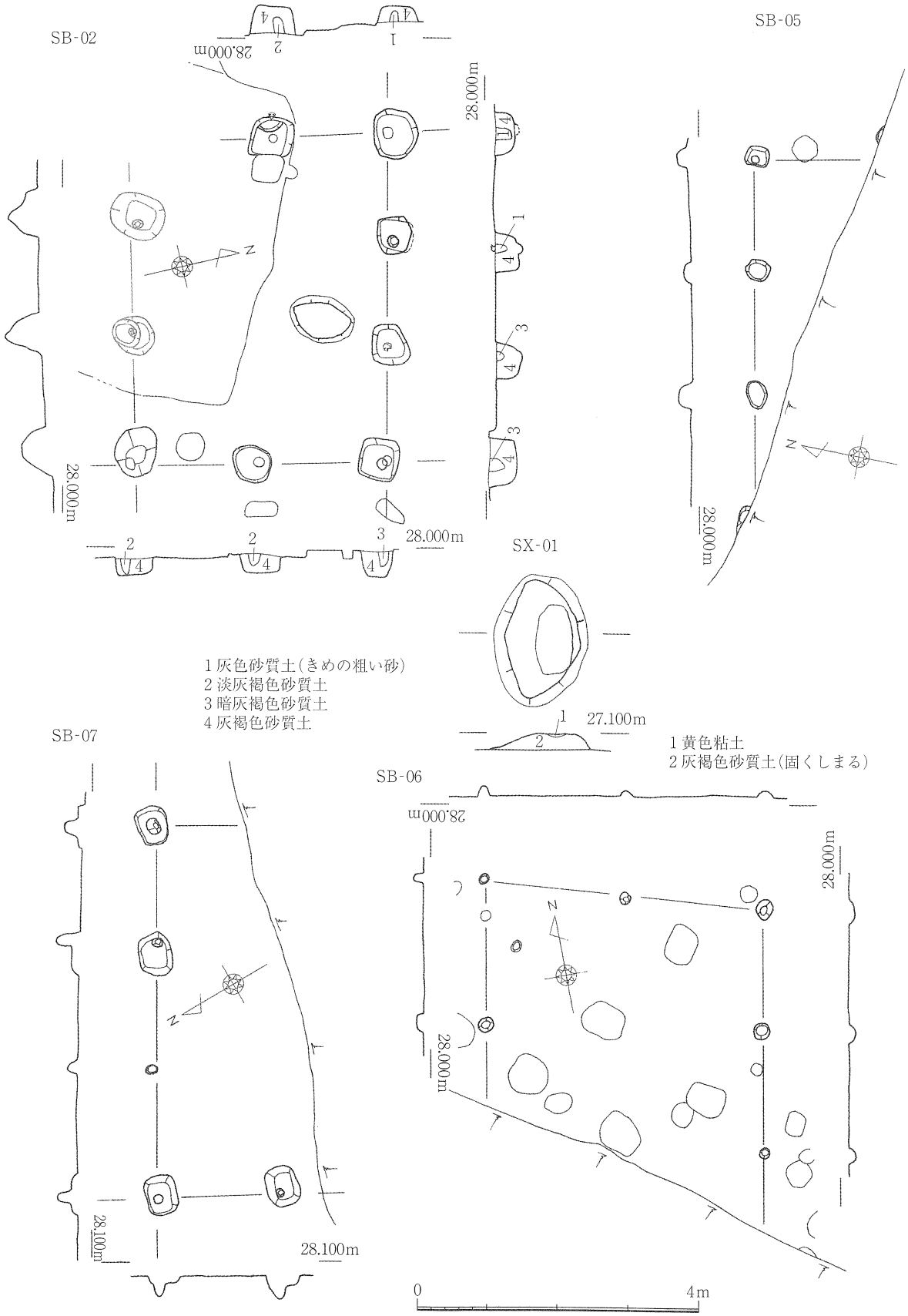


第14図　SH－02遺構図（S＝１／40）



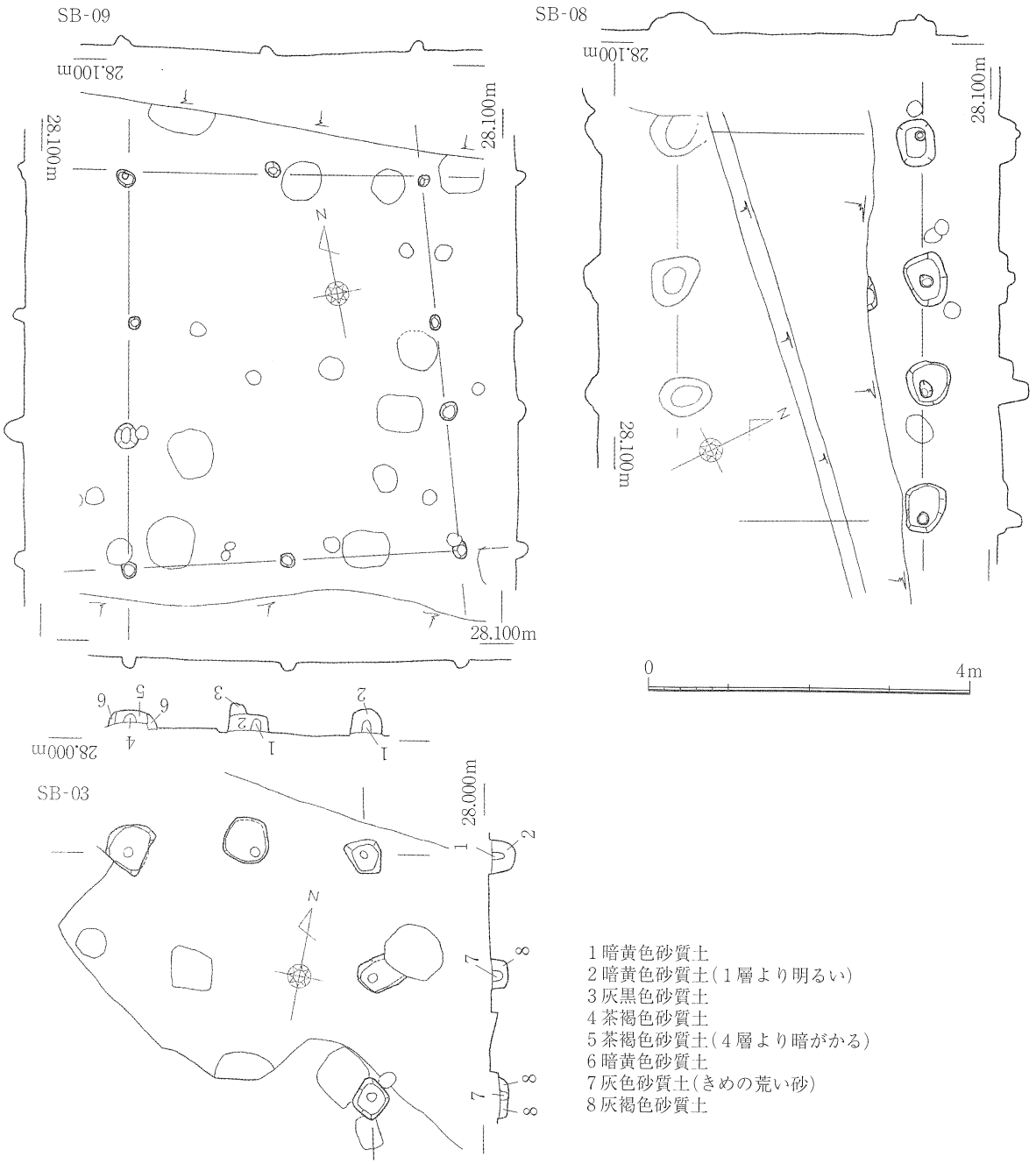
※南側は既報告図面を合成、作図した。

第15図　SB－01・04遺構図（S＝1／80）



※SB-02は既報告図面を合成、作図した。

第16図　SB－02・05・06・07遺構図（S＝1／80）



※SB-08は既報告図面を合成、作図した。

第17図　SB－03・08・09遺構図（S＝1／80）

SB－03（第17図、図版９）

Ⅰ区中央、SH－01とSH－02の間で検出した２間×２間の掘立柱建物で、SH－01と切り合い関係にある。それぞれの柱穴は、平面略円形や方形で直径は0.4～0.6m、深さは0.25～0.3mを測る。すべての柱穴で柱痕を確認した。南西側の柱穴は検出できなかった。また県調査でもこれに対応する柱穴は確認されていない。建物の主軸方位はN22°Wを測る。出土遺物は皆無である。

SB－04（第15図）

Ⅰ区中央、SH－02の南西部で検出した２間×４間の掘立柱建物で、SH－02と切り合い関係にある。それぞれの柱穴は、平面方形で直径は0.4～0.7m、深さは0.2～0.3を測る。すべての柱穴で柱痕を確認した。県調査ではこれに対応する掘立柱建物（SB－23）を検出しており、合成・復元したものが第14図となる。建物の主軸方位はN71°Eを測る。出土遺物は皆無であり、県調査では少量の土師器片が出土している。

SB－05（第16図、図版10）

Ⅰ区西側で検出した２間×３間の掘立柱建物である。それぞれの柱穴は平面略円形で、直径は0.3～0.4m、深さは0.1～0.3mを測り、一部の柱穴で柱痕を確認している。建物の主軸方位はN88°Eを測る。出土遺物は皆無である。

SB－06（第16図、図版10）

Ⅰ区西側で検出した２×３間の掘立柱建物である。建物南側は調査区外に広がっている。しかし県調査では対応する柱穴は検出されていない。それぞれの柱穴は平面略円形で、直径は0.16～0.3mと比較的小さく、深さも0.1～0.15mを測り浅い。建物の主軸方位はN30°Wを測る。出土遺物は皆無である。

SB－07（第16図、図版10）

Ⅰ区西側で検出した２間×３間の掘立柱建物である。建物南側は調査区外に広がっている。しかし県調査では対応する柱穴は検出されていない。それぞれの柱穴は平面方形で、直径は0.5～0.6m、深さは0.25～0.35mを測り、多くの柱穴で柱痕を確認した。建物の主軸方位はN46°Wを測る。出土遺物は皆無である。

SB－08（第17図、図版10）

Ⅰ区西側で検出した４基の平面略方形の柱穴列である。建物は調査区南側に広がり、県報告ではこれに対応する柱穴を検出しており、合成・復元したものが第９図となる。それぞれの柱穴の直径は0.5～0.6m、深さは0.2～0.4mを測り、それぞれの柱穴で柱痕を確認した。建物の主軸方位はN36°Wを測る。出土遺物は皆無である。

SB－09（第17図、図版10）

Ⅰ区西側で検出した２間×３間の掘立柱建物である。それぞれの柱穴は平面円形を呈し、直径は0.2～0.3mと比較的小さい。深さは0.15～0.25mを測る。検出した建物の主軸方位はN12°Eを測る。出土遺物は皆無である。

3．溝

SD－01（第18図、図版10、11）

Ⅱ区の調査区中央南端から調査区西に屈曲した形で検出した。幅1.2m、深さ0.3mで、断面形状はU字状を呈する。調査区南側に延びるが、県調査では確認していない。

出土遺物（第19図12・13、図版12）

12・13は土鍋の脚部である。室町時代の遺物であると考えられる。

SD－02（第18図、図版11）

Ⅱ区の調査区北端で検出した。調査区中央北端から調査区西端に向かっており、幅約0.8m、深さ0.3mを測る。断面形状はU字状を呈する。

出土遺物（第19図14～16、図版12）

14・15は土鍋の脚部で、付け根部分である。16は、把手部である。室町時代の遺物であると考えられる。

4．柱穴

SP－13（第18図）

Ⅱ区の調査区中央付近で検出した。長軸0.6m、短軸0.4mの楕円形を呈する。深さは0.4mを測る。

出土遺物（図版12－30）

須恵器甕の胴部が出土した。外面に並行タタキを施している。

SP－16（第18図）

Ⅱ区の調査区中央付近で検出した。長軸0.7m、短軸0.6mの楕円形を呈する。深さは0.4mを測る。

出土遺物（図版12－29）

須恵器甕の胴部が出土した。外面に並行タタキを施している。

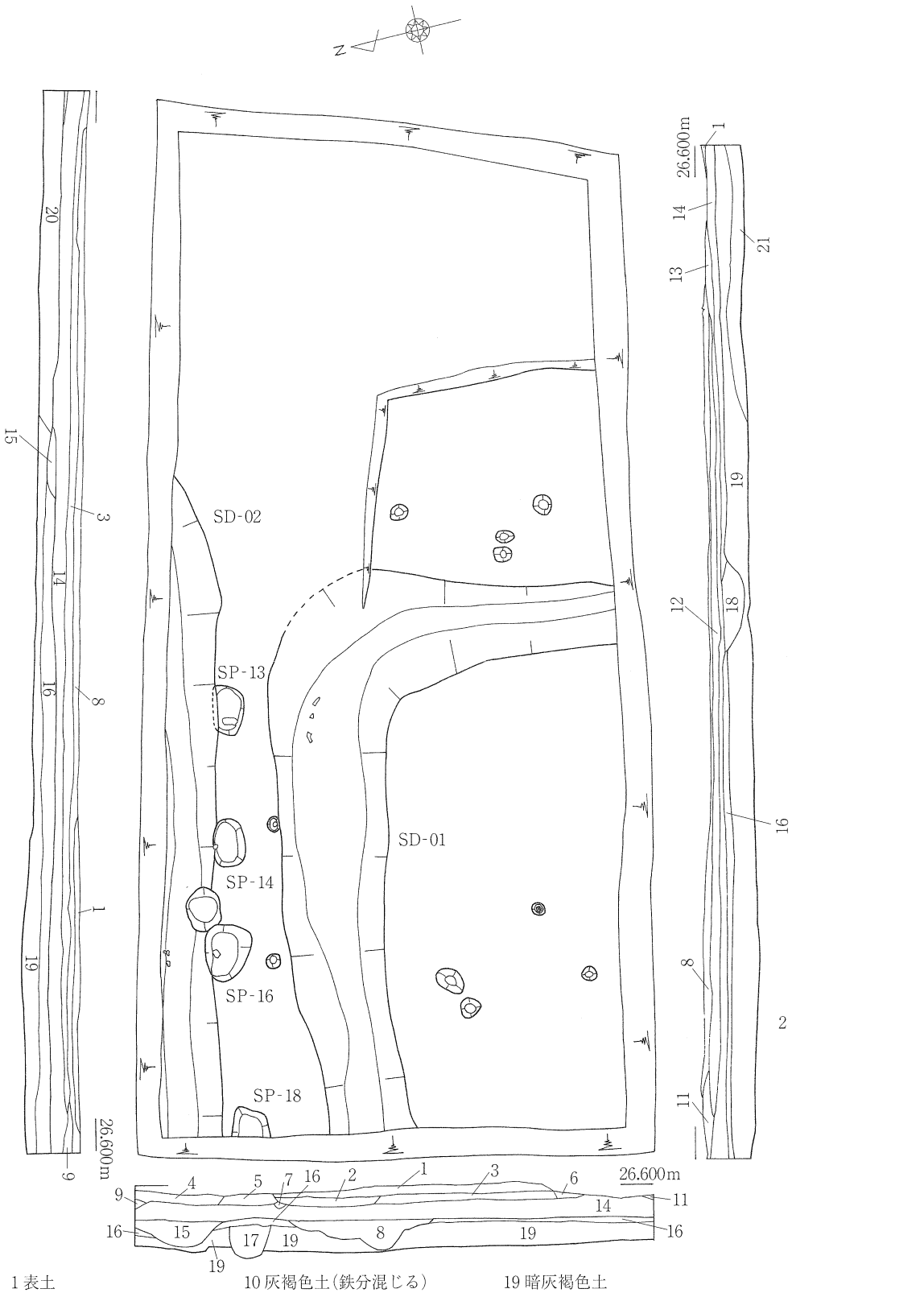
5．不明遺構（SX－01・第16図）

Ⅰ区のSB－02に囲まれるように検出した。硬く締まった土質の範囲は長軸で0.96m、短軸で0.67mを測り、0.1mの厚みをもっている。この遺構がSB－02またはSH－01にともなうものかは不明である。

6. 包含層出土遺物（第19図、図版12、13）

Ⅰ区包含層出土遺物（7・10・18～28・31～37）

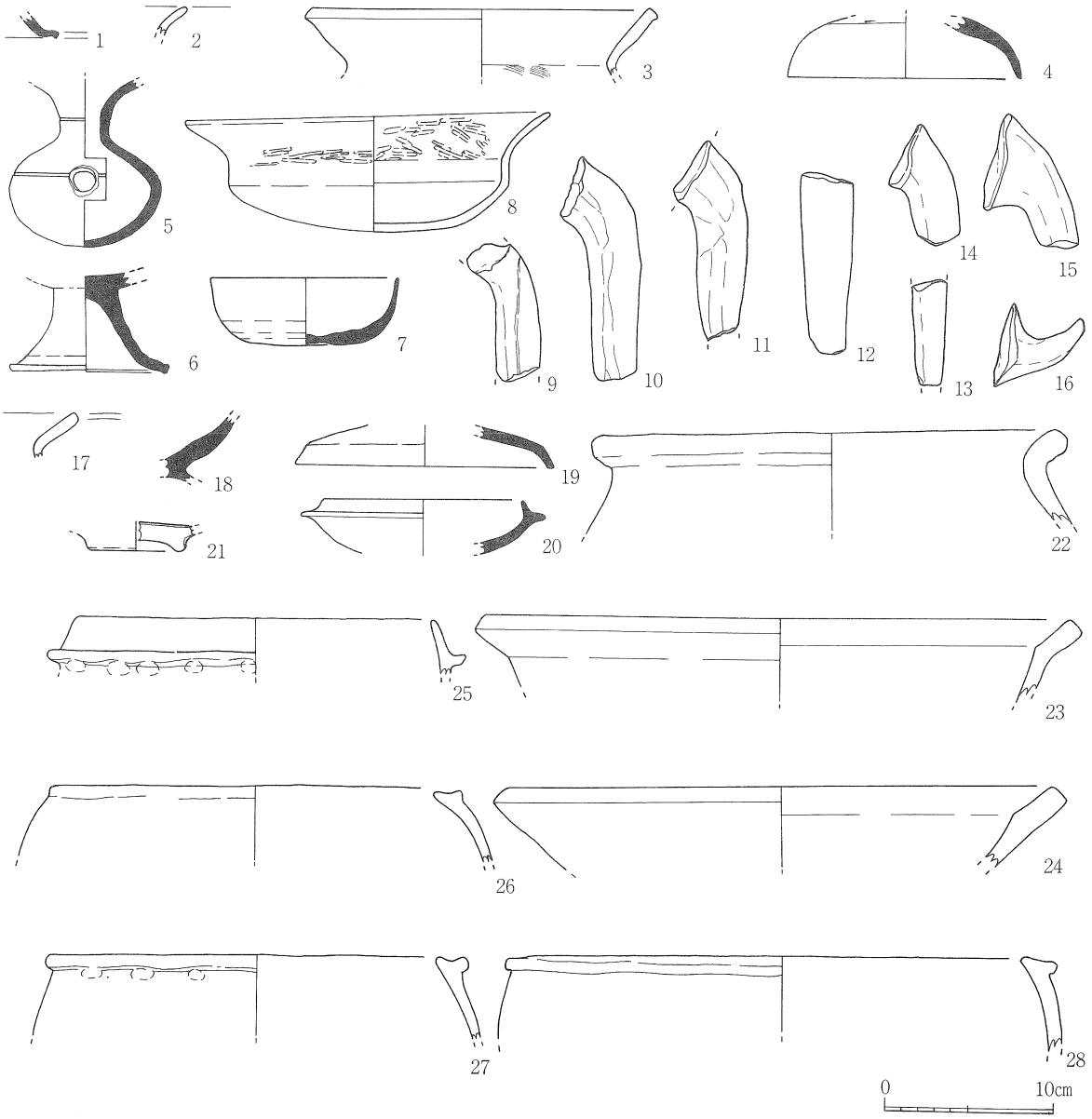
7・18～20は須恵器である。7は坏身である。平底に近い弯曲した底部で、口縁部はほぼ真上に伸びる。口径11.0cmを測る。18は高坏である。19は坏蓋の口縁部である。天井部を欠損している。低い天井部から明確な稜をもって屈曲し、口縁端部は平坦に仕上げている。口径15.6cmを測る。20は坏身である。口径11.6cm、身の深さ3.6cmを測る。底部を一部欠損している。返しは内傾して短く立ち上がる。以上の須恵器はTK217もしくはTK46併行であると考えられる。ただし20についてはTK217併行と考えられる。21は青磁の底部である。高台内面以外に施釉しており、淡い緑色を呈する。龍泉窯系である。22は甕である。屈曲部から短く外反する口縁で、端部をまるくおさめる。全体的に器壁が厚く、胎土は粗い。23・24は土鍋の口縁部である。23は内外面に稜をもって屈曲し、24は内面のみに屈曲する稜線をもつ。口縁端部は丁寧に面取りしている。10は土鍋の脚部で、25～28は土釜の口縁部である。鍔部が上端に付くもの（26～28）とやや下がった部位に付くもの（25）とに分かれる。22～28は室町時代の遺物と考えられる。



1 表土
2 黄褐色粘質土
3 黄灰褐色土
4 暗灰褐色土
5 灰褐色土
6 暗灰褐色土
7 灰褐色土（6層より明るい）
8 灰色土（赤茶褐色土混じる）
9 灰黄褐色土
10 灰褐色土（鉄分混じる）
11 灰赤茶色土（12層より明るい）
12 灰赤茶色土
13 淡赤茶色土
14 灰褐色土
15 暗黄褐色土（SD-02埋土）
16 灰褐色土（鉄分混じる）
17 暗灰色砂質土（SP-18埋土）
18 暗黄褐色土（SD-01埋土）
19 暗灰褐色土
20 暗灰褐色砂質土（きめ粗い）
21 灰褐色砂質土

0　4 m

第18図　Ⅱ区遺構平面図及び壁面断面図（S＝1／80）



第19図　出土遺物実測図（S＝1／4）

II区包含層出土遺物（8・11・17）

8はII区東側の落ち込みから出土した浅鉢である。丸底から緩やかに立ち上がり、口縁部は明確な稜をもって立ち上がりさらに稜をもって外方に開き、端部を丸くおさめる。内外面に磨きが施されている。縄文時代晩期前半と考えられる。11は土釜の脚部である。室町時代の遺物と考えられる。17は土師器甕の口縁部の破片である。口縁端部に不明瞭な平坦面をもつ。

第4章　まとめ

南天枝遺跡で検出した遺構は、掘立柱建物が46棟（町調査分９棟、県調査分41棟、そのうち４棟が両調査区を跨いでいる）、竪穴住居が３棟（町調査分２棟、県調査分２棟、そのうち１棟は両調査区を跨いでいる）である。

竪穴住居のうち、SH－01は竈をもち平面隅丸方形の住居址である。出土遺物が少ないが、県調査では７世紀前半が当てられている。県調査報告では比較的規模の大きな建物群（４間×３間や総柱建物、独立棟持柱建物など）が群在しているが、今回の調査区では一回り小さな建物（２×３間がほとんど）を検出している。前者はほとんどが近世に属するものであり、今回の調査では包含層遺物には近世のものが多く見受けられるが、伴う遺構が少なかった。後者は７世紀から８世紀の年代が当てられているもので、今回の調査ではこれらの遺構を多く検出した。

古代の集落を考える上で条里の問題は重要である。しかし、今回の調査区からは条里区画と考えられるものは検出できなかった。県埋文報告では調査区東端に南北に走る溝を検出しており、区画溝と考えられている。その溝に区画される５グループ（５期）の集落を想定しており、今回の調査区はその集落域の一部にあたるものである。当遺跡の周辺をみると、条里地割が確認されている遺跡が存在する。尾端遺跡、砂入遺跡では現在の地割に沿った溝が確認されている。

包含層から出土した遺物を概観すると、古代前半の須恵器や中世の土釜、青磁、江戸時代以降の遺物が見受けられる。県報告でも同様の時代の遺物が出土しており、遺構的な繋がりからも一連の遺跡の性格を有している。

Ⅱ区の落ち込みからは縄文時代晩期の浅鉢が１点出土している。この落ち込みは県調査では浅谷３と報告しているものに対応すると思われるが（註１）、県調査では縄文時代の遺物は出土していない。三木町内で縄文時代の遺構・遺物は少数ではあるが報告例がある。西浦谷遺跡と尾端遺跡では落とし穴状遺構、農学部遺跡からは縄文時代晩期の遺物が見つかっている。特に農学部遺跡は当遺跡からみると、吉田川の対岸１㎞に位置し、縄文時代遺物の関連性が強い。また、弥生時代前期の遺物も農学部遺跡や福万遺跡から出土している。三木町において、平野部中央の吉田川付近が縄文時代から弥生時代のはじまりにかけての遺構・遺物が集中する地域であるといえる。

註１　調査区２と県報告の調査区３が遺構の繋がりがないのは、調査区２が上層遺構面でとめているのに対し、調査区３は浅谷の底で検出しているからである。

参考文献

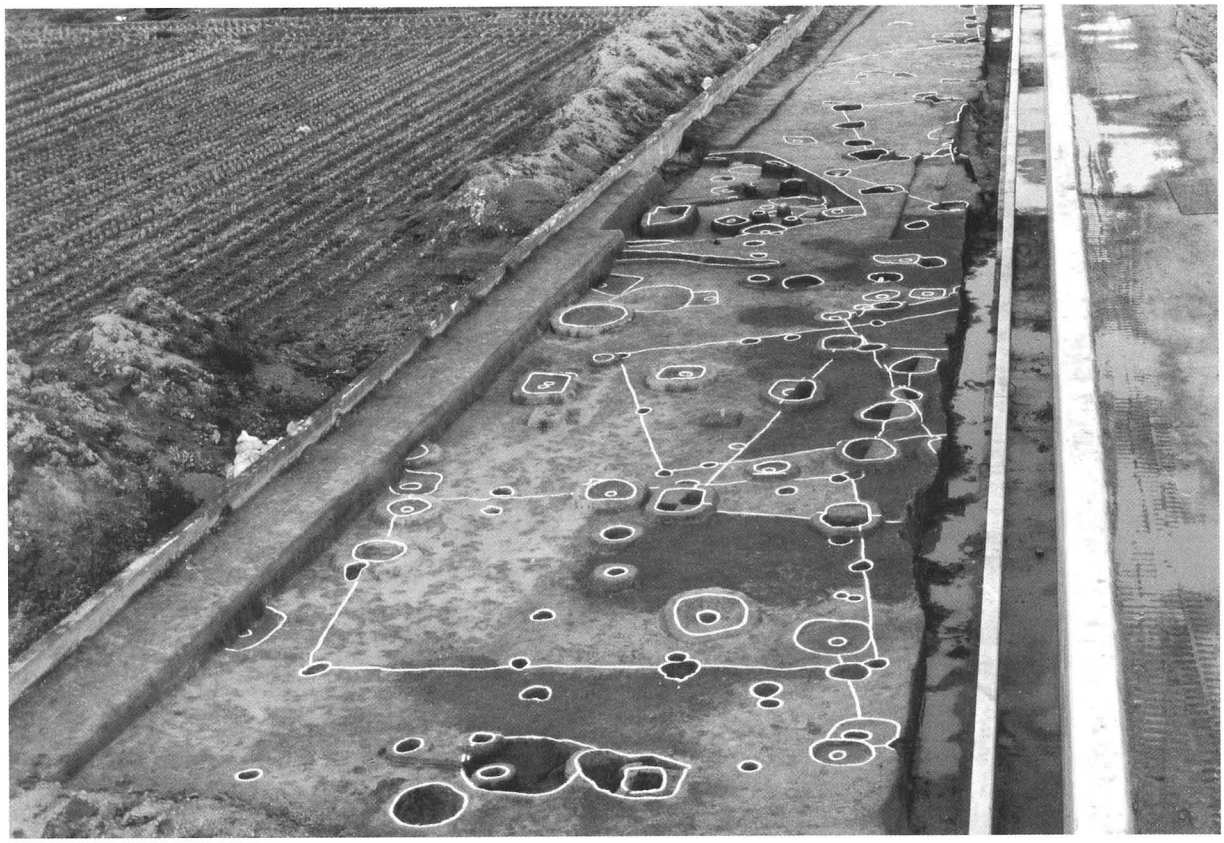
西村尋文編　2003『寺田・産宮通遺跡　南天枝遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター

遺　物　観　察　表

遺物番号	取上番号	調査区	遺構名	分類	器種	現存部位	法量(cm)			成形および調整技法(外面／内面)	色調(外面／内面)	胎土	焼成	備考
							口径	器高	底径					
1		Ⅰ区	SH−01 上層	須恵器	坏蓋	口縁部	−	(1.3)	−	回転ナデ／回転ナデ	灰色(7.5Y 6／1)／ 灰色(7.5Y 6／1)	密	堅緻	
2		Ⅰ区	SP−62 (SH−01)	土師器	甕	口縁部	−	(2.7)	−	ナデ	にぶい黄橙色(10YR7／4) にぶい黄橙色(10YR7／4)	精良。1～2㎜の砂粒を若干含む	良好	
3	1	Ⅰ区	SH−01 上層	土師器	甕	口縁部	20.0	(4.0)	−	ナデ／ナデ	橙色(7.5YR 7／6) 橙色(7.5YR 7／6)	精良。1～2㎜の砂粒を若干含む	良好	
4		Ⅰ区	SH−02	須恵器	坏蓋	口縁部	13.6	(3.7)	−	回転ナデ／回転ナデ	灰色(7.5Y 6／1)／ 灰色(7.5Y 6／1)	密	堅緻	
5		Ⅰ区	SP−114	須恵器	甕	胴部	−	頸部 2.9	−	回転ナデ／回転ナデ	灰白(10YR 7／1) 灰白(10YR 7／1)	粗い。1～2㎜の砂粒やや多く含み、4㎜のものも含む	堅緻	孔の周辺にはがれ痕あり
6		Ⅰ区	SP−111	須恵器	高坏	脚部	5.2	(9.0)	5.2	回転ナデ／回転ナデ	灰色(7.5Y 6／1)／ 灰色(7.5Y 6／1)	密	堅緻	
7	1	Ⅰ区	調査区西端	須恵器	坏身	完形	11.0	4.0	6.5	回転ナデ／回転ナデ	灰色(7.5Y 6／1)／ 灰色(7.5Y 6／1)	密	堅緻	
8		Ⅱ区	落ち込み	縄文土器	浅鉢	完形	21.5	6.4	6.4	磨き・ナデ／磨き・ナデ	にぶい黄橙色(10YR6／4) にぶい黄橙色(10YR6／4)	1～3㎜の白色小礫を少量含む	良好	
9		Ⅰ区	SP−52	土師器	土鍋	脚部	−	(6.2)	−	ナデ	橙色(7.5YR 6／6) 橙色(7.5YR 6／6)	1～3㎜の砂粒やや多く含む	良好	
10		Ⅰ区	包含層	土師器	土鍋	脚部	−	(8.1)	−	ナデ	にぶい黄橙色(10YR7／4) にぶい黄橙色(10YR7／4)	1～3㎜の砂粒やや多く含む	良好	
11		Ⅱ区	包含層	土師器	土鍋	脚部	−	(11.8)	−	ナデ	にぶい黄橙色(10YR6／4) にぶい黄橙色(10YR6／4)	1～3㎜の砂粒やや多く含む	良好	
12	1	Ⅱ区	SD−01	土師器	土鍋	脚部	−	(13.2)	−	ナデ	明黄橙色(10YR 7／6) 明黄橙色(10YR 7／6)	精良。1～2㎜の砂粒を若干含む	良好	
13	3	Ⅱ区	SD−01	土師器	土鍋	脚部	−	(10.7)	−	ナデ	明黄橙色(10YR 7／6) 明黄橙色(10YR 7／6)	精良。1～2㎜の砂粒を若干含む	良好	
14	2	Ⅱ区	SD−02	土師器	土鍋	脚部	−	(7.0)	−	ナデ	にぶい黄橙色(10YR6／4) にぶい黄橙色(10YR6／4)	1～2㎜の砂粒を若干含む	良好	
15	1	Ⅱ区	SD−02	土師器	土鍋	脚部	−	(7.8)	−	ナデ	にぶい黄橙(10YR6／4) にぶい黄橙(10YR7／4)	1～2㎜の砂粒を若干含む	良好	外面に煤付着
16		Ⅱ区	SD−02	土師器	甑?	把手	−	(5.0)	−	ナデ	明黄橙色(10YR 7／6) 明黄橙色(10YR 7／6)	1～3㎜の砂粒やや多く含む	良好	
17		Ⅱ区	包含層	土師器	甕	口縁部	−	(2.6)	−	ナデ	にぶい黄橙色(10YR7／4) にぶい黄橙色(10YR7／4)	1～3㎜の砂粒多く含む。	良好	外面に煤付着
18	2	Ⅰ区	調査区西端	須恵器	高坏	坏部	−	(3.7)	−	回転ナデ／回転ナデ	灰色(7.5Y 6／1)／ 灰色(7.5Y 6／1)	密	堅緻	
19	3	Ⅰ区	調査区西端	須恵器	蓋坏	口縁部	15.2	(2.5)		回転ナデ／回転ナデ	灰色(7.5Y 6／1)／ 灰色(7.5Y 6／1)	密	堅緻	
20		Ⅰ区	包含層	須恵器	坏身	口縁部	11.6	(3.3)	−	回転ナデ／回転ナデ	灰色(7.5Y 6／1)／ 灰色(7.5Y 6／1)	密	堅緻	
21		Ⅰ区	包含層	青磁	碗	底部	−	(1.7)	5.0	回転ナデ／回転ナデ	釉　明青灰色(10BG7／1) 露地　灰白色(N8／)	密	堅緻	

遺物番号	取上番号	調査区	遺構名	分類	器種	現存部位	法量(cm)			成形および調整技法(外面／内面)	色調(外面／内面)	胎土	焼成	備考
							口径	器高	底径					
22		Ⅰ区	包含層	土師器	甕	口縁部	27.2	(6.0)	－	ナデ／ナデ	浅黄橙色(10YR８／４) 浅黄橙色(10YR８／４)	１～３㎜の砂粒多く含む。	良好	
23		Ⅰ区	包含層	土師器	土鍋	口縁部	34.0	(4.8)	－	ナデ／ナデ	浅黄橙色(10YR８／４) 浅黄橙色(10YR８／４)	１～３㎜の砂粒多く含む。	良好	
24		Ⅰ区	包含層	土師器	土鍋	口縁部	34.4	(5.0)	－	ナデ／ナデ	浅黄橙色(10YR８／４) 浅黄橙色(10YR８／４)	１～３㎜の砂粒多く含む。	軟質	
25		Ⅰ区	包含層	土師器	土釜	口縁部	20.6	(3.2)	－	ナデ／ナデ	浅黄色(2.5YR７／３) 浅黄色(2.5YR７／３)	１～２㎜の砂粒少量含む。	良好	内面に煤付着
26		Ⅰ区	包含層	土師器	土釜	口縁部	21.0	(4.0)	－	ナデ／ナデ	橙色(7.5YR６／６) 黒褐色(7.5YR３／１)	１～３㎜の砂粒多く含む。	良好	
27		Ⅰ区	包含層	土師器	土釜	口縁部	21.0	(4.9)	－	ナデ／ナデ	橙色(7.5YR６／８) 橙色(7.5YR６／８)	１～３㎜の砂粒多く含む。	良好	
28		Ⅰ区	包含層	土師器	土釜	口縁部	28.2	(5.5)	－	ナデ／ナデ	明黄褐色(10YR６／６) 橙色(7.5YR６／８)	１～３㎜の砂粒多く含む。	良好	
29		Ⅱ区	SP－16	須恵器	甕	胴部	－	－	－	タタキ/青海波紋	灰色(7.5Y６／１) ／灰色(7.5Y６／１)	密	堅緻	
30		Ⅱ区	SP－13	須恵器	甕	胴部	－	－	－	タタキ/青海波紋	灰色(7.5Y７／１) ／灰色(7.5Y７／１)	密	堅緻	
31		Ⅰ区	包含層	磁器	碗	底部	－	(3.0)	－	回転ナデ／回転ナデ	釉　淡緑色 露地　灰白色(N８／)	１～３㎜の砂粒多く含む。	良好	
32		Ⅰ区	包含層	磁器	碗	口縁部	－	(2.1)	－	回転ナデ／回転ナデ	釉　淡緑色 露地　灰白色(N８／)	１～３㎜の砂粒多く含む。	良好	
33		Ⅰ区	包含層	磁器	碗	口縁部	－	(5.5)	－	回転ナデ／回転ナデ	釉　淡緑色 露地　灰白色(N８／)	１～３㎜の砂粒多く含む。	良好	
34		Ⅰ区	包含層	須恵器	坏身	口縁部	－	(1.4)	－	回転ナデ／回転ナデ	灰色(7.5Y６／１) ／灰色(7.5Y６／１)	密	堅緻	
35		Ⅰ区	包含層	須恵器	坏身	口縁部	－	(2.1)	－	回転ナデ／回転ナデ	灰色(7.5Y６／１) ／灰色(7.5Y６／１)	密	堅緻	
36		Ⅰ区	包含層	土師器	甕	口縁部	－	(3.0)	－	ナデ／ナデ	浅黄橙色(10YR８／４) 浅黄橙色(10YR８／４)	１～３㎜の砂粒多く含む。	良好	
37		Ⅰ区	包含層	土師器	土釜	口縁部	－	(5.5)	－	ナデ／ナデ	明黄褐色(10YR６／６) 橙色(7.5YR６／８)	１～３㎜の砂粒多く含む。	良好	

写　真　図　版

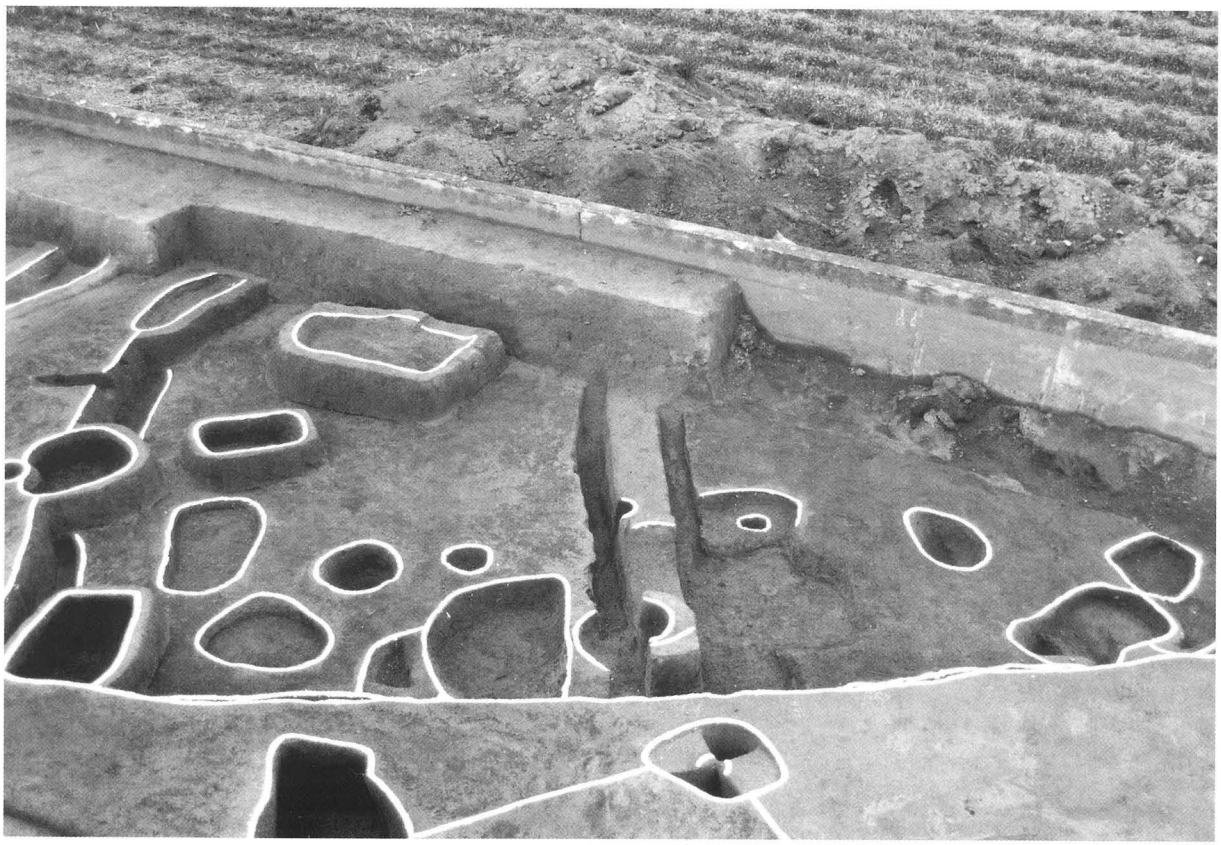


Ⅰ区近景　西から

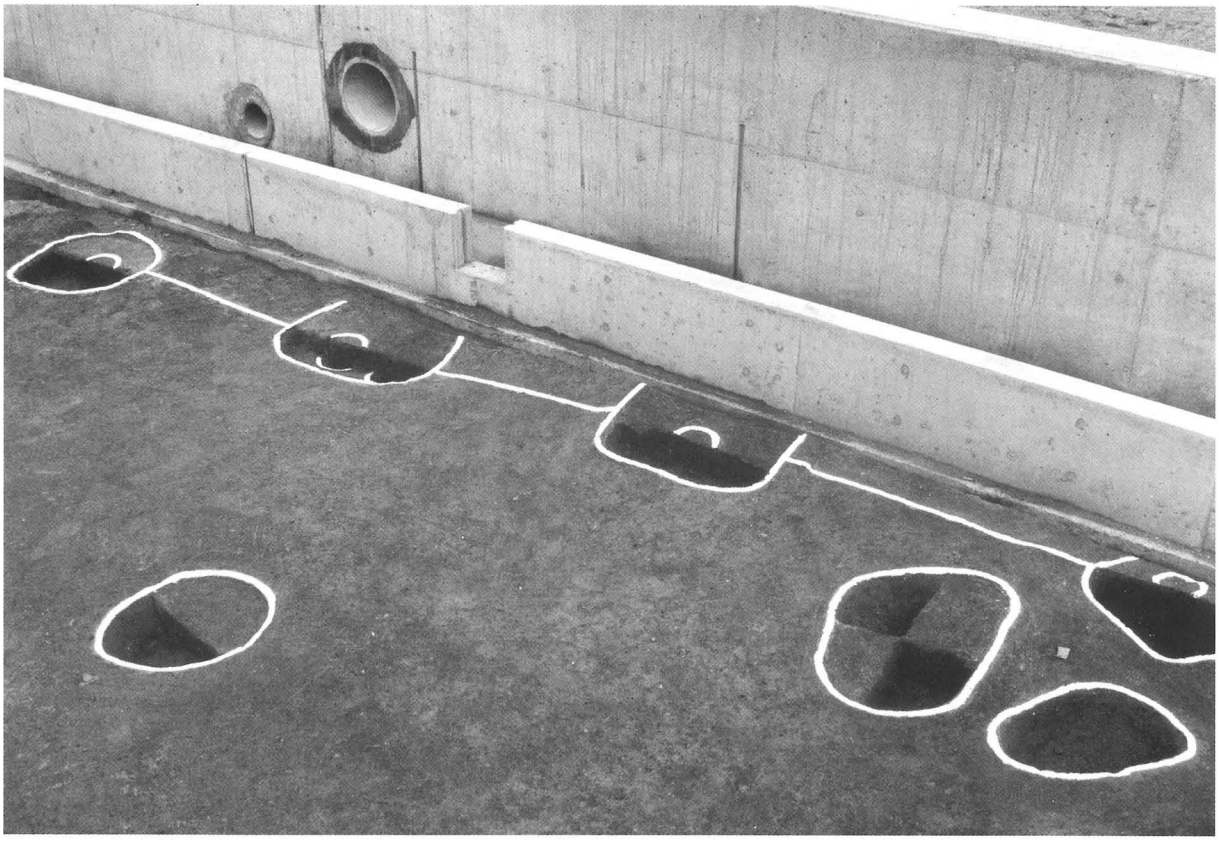
SH－01　検　出　状　況

図版 7

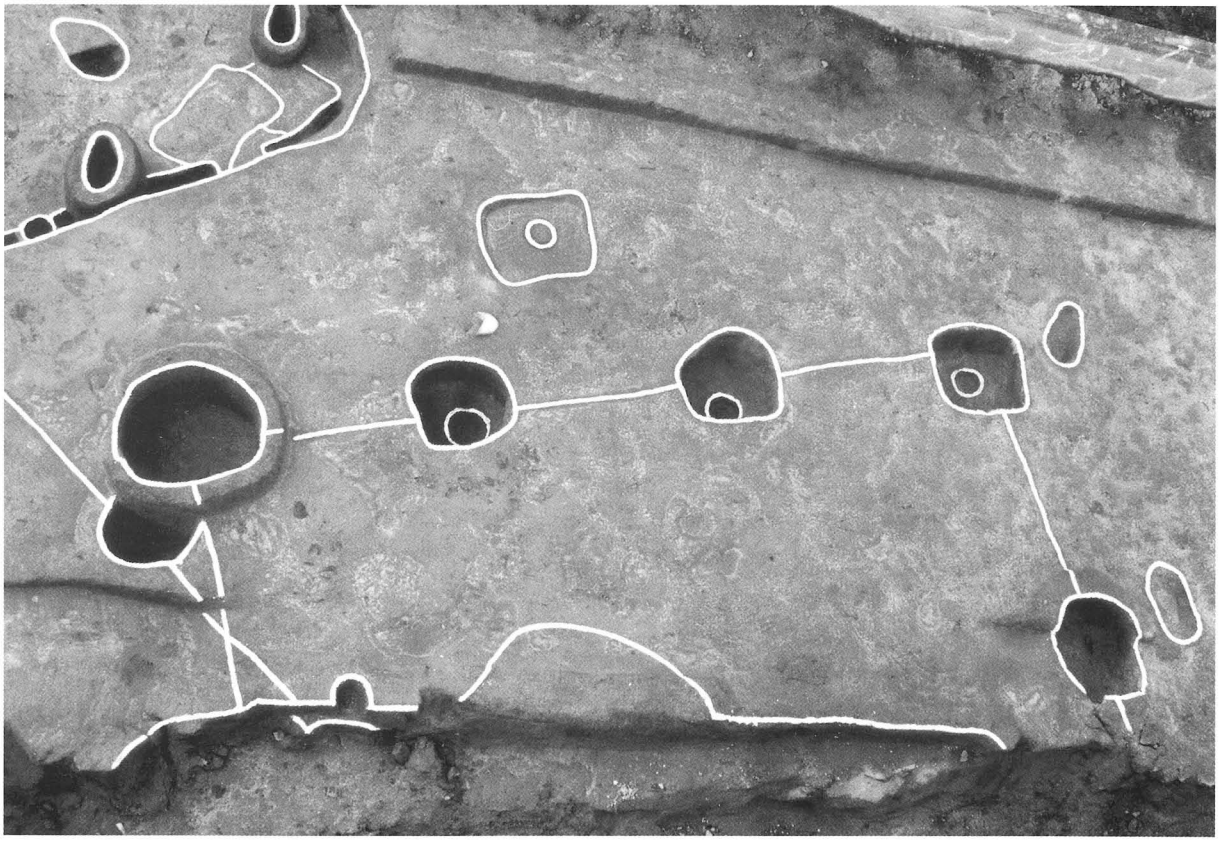
SH－01　竈　土　層　断　面



SH－02　完　掘　状　況



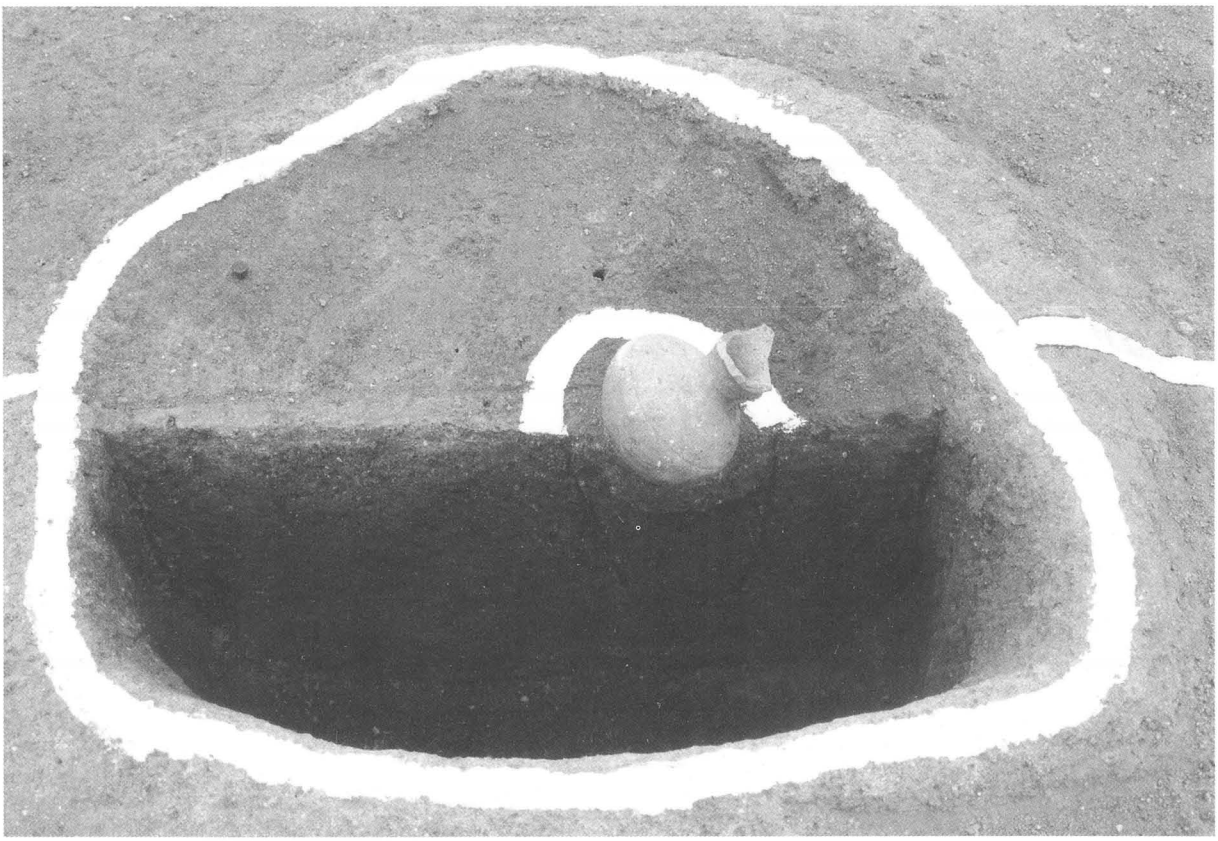
SB－01　検　出　状　況



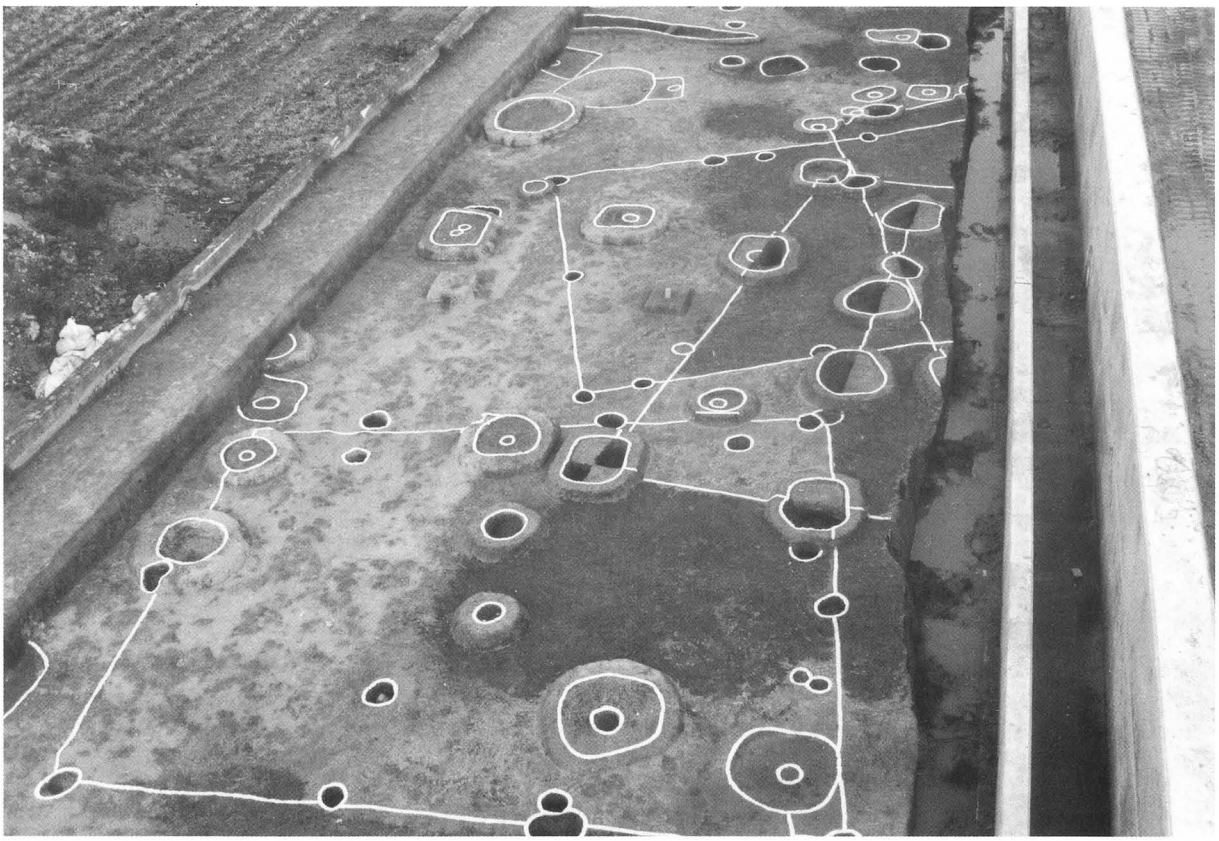
SB－02　完　掘　状　況

図版 9

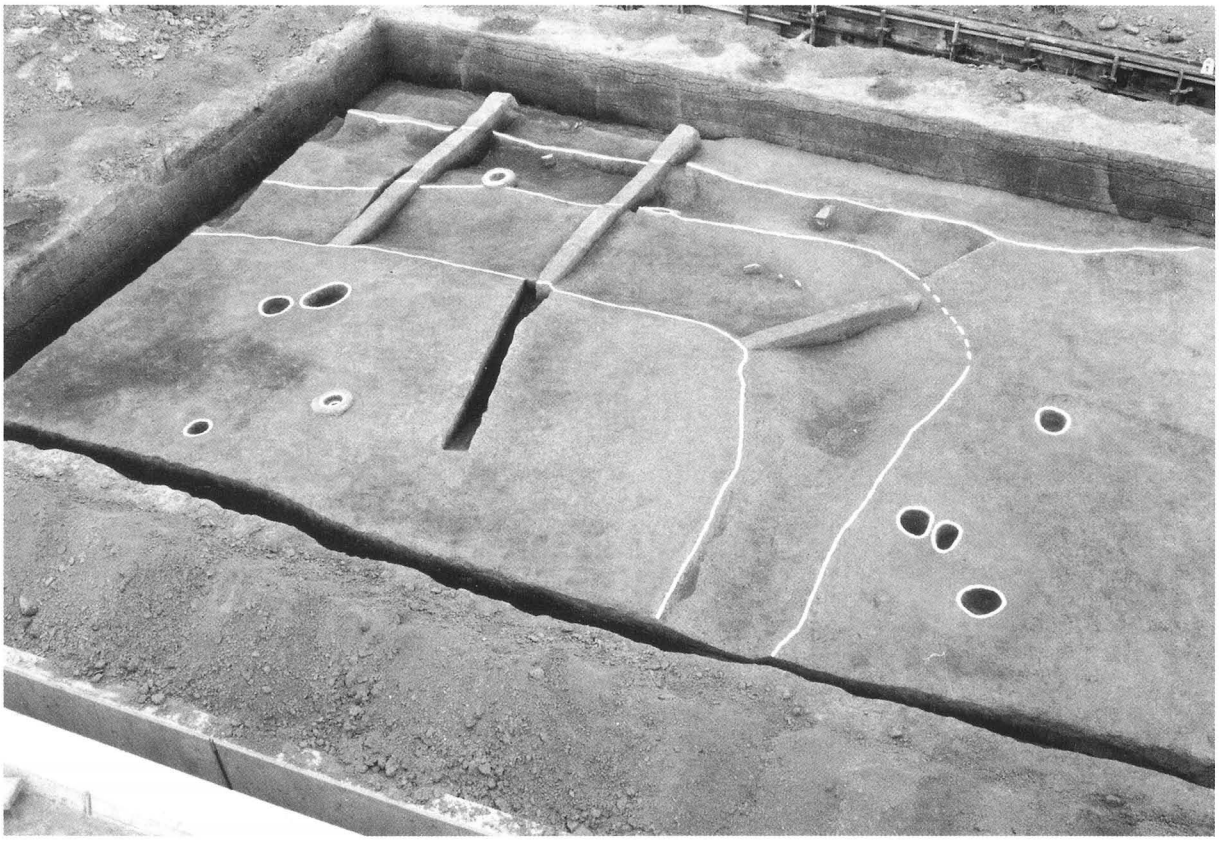
SB－02・03　検　出　状　況



SP－114（SB－02）遺物出土状況

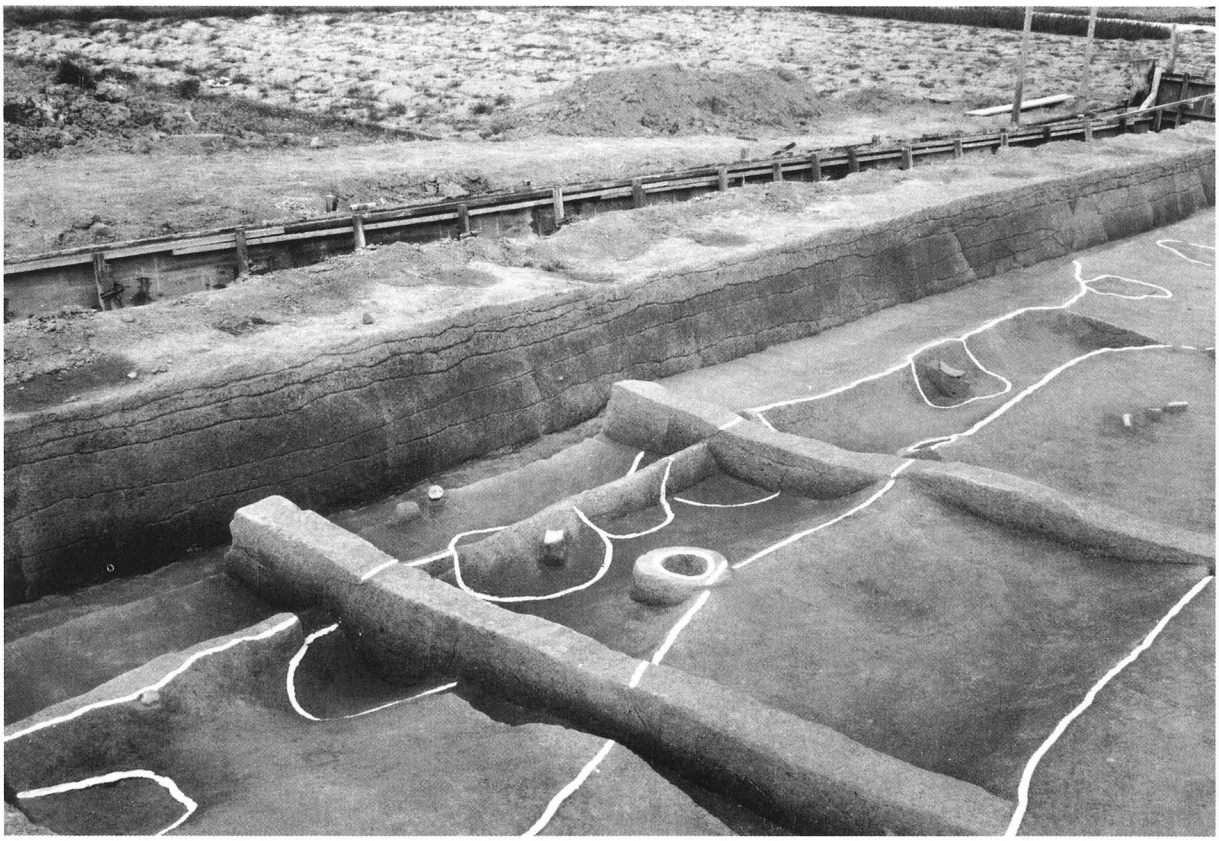


SB－05～09　完掘状況

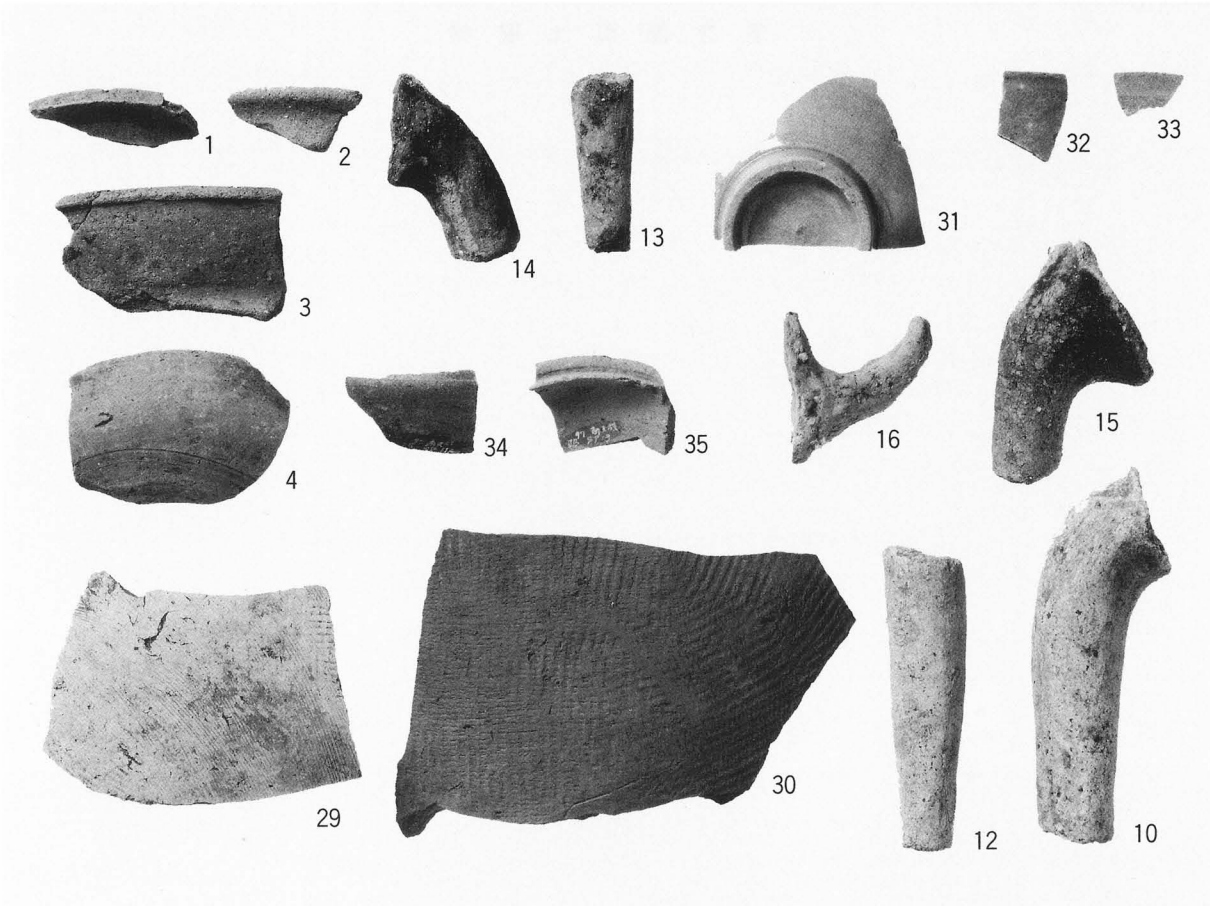


Ⅱ　区　完　掘　状　況

図版11

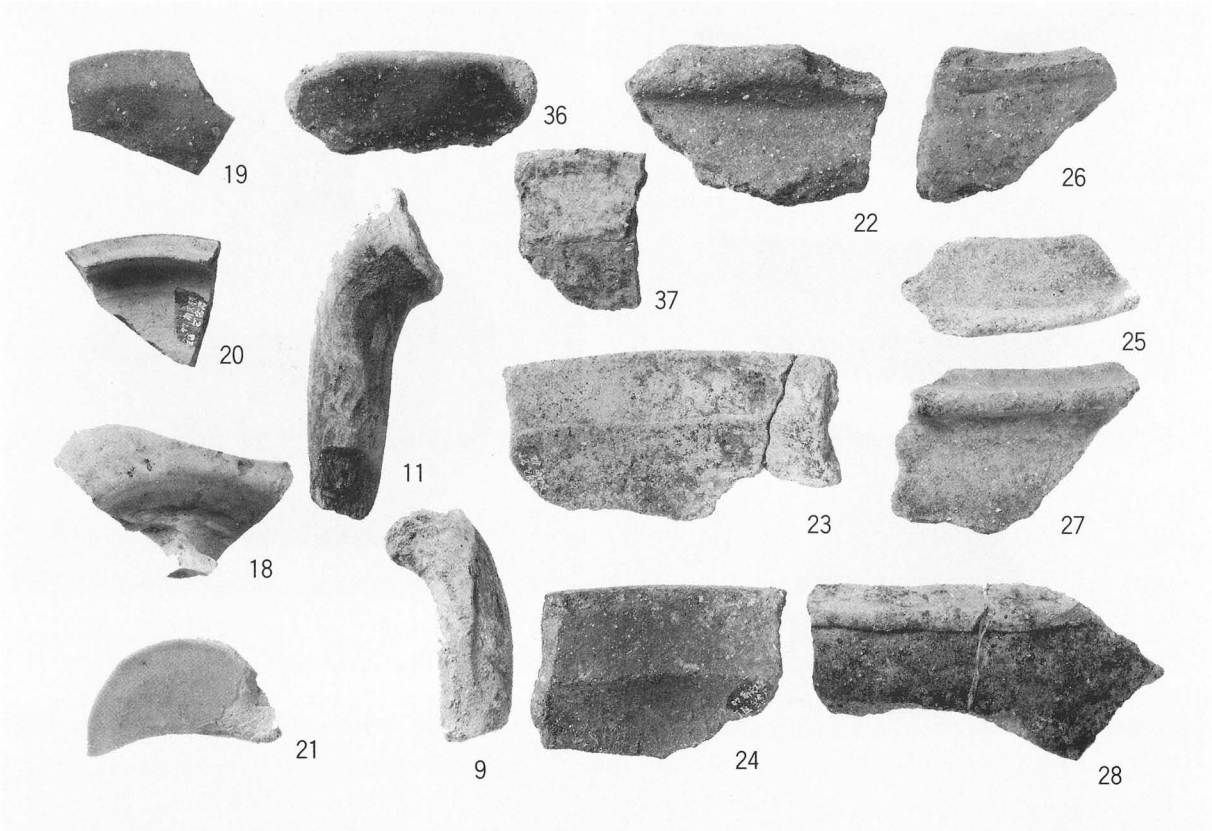


Ⅱ区SD－02　完　掘　状　況



遺 構 出 土 遺 物

図版13



包 含 層 出 土 遺 物

報告書抄録

ふりがな	やまだいじいけにしきゅうじょう２・３ごうふん　みなみあまえだいせき
書名	山大寺池西丘上２・３号墳　南天枝遺跡
副書名	
巻次	2004.3
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	持田　透
編集機関	㈱イビソク
所在地	岐阜県大垣市築捨町３丁目102番地　TEL0584－89－5507
発行機関	三木町教育委員会
発行年月日	2004.3.31

総頁数	目次	本文	観察表	図版	写真枚数	挿図枚数	付図枚数
72	3	34	4	21	17	21	0

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町	コード 遺跡	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
山大寺池西丘上２・３号墳（やまだいじいけにしきゅうじょう）	香川県木田郡三木町大字上高岡字山大寺（かがわけんきだぐんみきちょうおおあざかみたかおかあざやまだいじ）	37341	00136	34度14分27秒	134度08分30秒	1994.7.17～1994.8.5	700	災害復旧
南天枝遺跡（みなみあまえだいせき）	香川県木田郡三木町田中字南天枝（かがわけんきだぐんみきちょうたなかあざみなみあまえだ）	37341	00196	34度15分42秒	134度07分30秒	1997.2.13～1997.3.31	460	民有地 地下げ

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山大寺池西丘上２・３号墳	古墳	弥生時代終末期 古墳時代後期	方形周溝墓　1基（3号墳） 円　墳　1基（2号墳）	弥生土器 須恵器	
南天枝遺跡	集落遺跡	古墳時代後期 古代 江戸時代	竪穴住居 掘立柱建物	土師器 須恵器 陶磁器	縄文時代晩期の浅鉢 古墳時代後期の掘立柱建物群

山大寺池西丘上２・３号墳
南　天　枝　遺　跡

2004年３月

発　行　三木町教育委員会
〒761－0692
香川県木田郡三木町大字氷上310
TEL：087－891－3314

印　刷　㈱イビソク
岐阜県大垣市築捨町３丁目102番地
TEL：0584－89－5507